

三月号  
 文楽在人形浄瑠璃



河庄



したれも理の  
 うらまは  
 いりか  
 ぶ



文楽

一部  
 金拾五銭  
 四三

淨隔

# 保名物語で名高い

# 信太森 葛の葉稻荷へ

お社のすく前に

新駅 葛葉稻荷駅 が出来ました

初午 三月十日 授御守  
安産御 三月二十二日 授御守

大阪よ物云せ分  
片道二十錢

白浜湯崎温泉

白高川

道成寺



柳 和歌浦

東和歌山

お身後郎英

水間観音

黒島山懸

千枝社佳地

聖王神社

葛葉稻荷

浜寺

保名物語 葛の葉稻荷

天王寺

のりば あべの橋

# 阪和電鉄

つて一子を授けられた安倍保名の喜びは一通りでなく、これは信太森稻荷大明神の授子である。慈愛こめて育つる中、百日祝も過ぎた或日のこと妻は部屋障子に「戀しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の葉のうらみ葛の葉」の一首を残し突然白狐化し消え去つてしまつた。信太は信太森に詣で、見るも是迄なかつた葛の葉が社頭に生茂つて居るのでこの葛の葉を頂いてお守りなした所その子は何の障りもかゝ安らかに育つて後、宮中陰陽寮に奉仕するに至つた、安倍晴明は即ちこの人である。これが葛の葉のお守を給はつて子授け及び安産を祈る由緒ある。葛の葉お守の靈驗著しきことは世人に普く知らしめきのお守を懐中する人の祈願は必ず成就して種々の災難を避け開運出世し子無き人安産を祈る人のお詣りは勿論のこと、物をふやすことを祈る人良縁を望む人のお詣りが絶えぬ。最近阪和電鐵では稻荷神社すく前に葛葉稻荷驛を開驛したのでお詣りには大變便利である。

吉野の葉言可

# 三味線

有 味 香 山 始 心 産 別

通 行 小 田 香

大 橋 香

中 山 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

大 橋 香

行興生彌の作名  
**文樂座人形浄瑠璃**

三日の豫定時間表

前 妹脊山婦女庭訓

道行戀の小田巻

道行戀の小田巻より  
 入鹿大臣金殿まで  
 (三時より三時三十分まで)  
 御休憩幕間 十分間

鱧七上使の段  
 姫戻りの段  
 金殿の段

(三時四十分より 四時二十五分まで)  
 (四時二十五分より 四時四十五分まで)  
 (四時四十五分より 五時三十五分まで)  
 御休憩幕間 十五分間

中 小春心中天網島

治兵衛河庄の段

(五時五十分より 七時十五分まで)  
 御休憩幕間 十五分間

次 蘆屋道満大内鑑

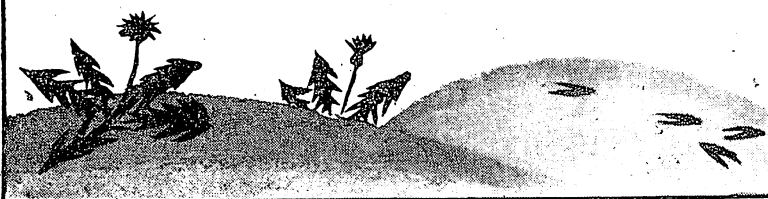
保名物狂の段  
 葛の葉子別の段  
 二人奴の段

保名物狂の段より  
 葛の葉子別れ二人奴まで  
 (七時三十分より 七時五十五分まで)  
 (八時より 九時十分まで)  
 (九時十五分より 九時三十五分まで)  
 御休憩幕間 十分間

切 傾城反魂香

吃又平名筆の段

(九時四十五分より 十時四十分まで)





## 人形淨瑠璃考

◆人形芝居發達の事

◆又樂座なり立ちの事

◆人形頭説明の事

今から見れば簡単なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたご御座います。其當時に、四三ご云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、ご云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしう御座います。浄土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたもので、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの據頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線の渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋ご云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線の上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形ご此三者が綜合される事に成りました。

たのが、慶長年中、即ち徳川の始  
頃です、忽ちにして京では四條五  
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋  
町さか、榴が立つて此人形芝居が繁  
昌したのであります。順序として當  
然此頃には最う人形の類も増しては  
ゐたのですが、然し舞臺などは固よ  
り無く其人形さて首があるばかり、  
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖  
口へ出されて舞されたもので、大阪  
の石井飛彈掾が始めて其手足の工夫も  
したものですさか。由來此掾號なる  
ものは人形師の所有なりしを後に淨  
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす  
るに至つたこの事。さて竹田のから  
くり人形が出来たり、野呂松のの

るま人形が出来たり、次郎三郎が  
おやま人形を使つたり、殊には彼  
の元祿時代になるご大阪へ義太夫が  
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁  
が現はれて此義太夫節のために人形  
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書  
き卸し、しかも其人形遣ひとして  
辰松八郎兵衛さ云ふ名人が出て、  
今の出遣ひの如きも此人によつて始  
まつたさ云ふのが、始めは此人形を  
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し  
て遣つてゐたので、畢竟人形の動  
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く  
之が見好くないから黒幕の陰に黒頭  
巾して遣つてゐたものを、愈々今度  
八郎兵衛が袷を着け手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂る  
事もないといふ評判を取つたので  
あります。加之他方また豊竹座の出  
來るあり、即ち西さ東さ同じ大阪の  
地に於て太夫三味線、作者から人形  
遣ひさ全く競争的に繁昌を來した  
のですから、従つて其進歩發達は眼  
覺しいものがあり、道具建から人形  
衣裳總ては美々しく立派やかを盡  
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら  
山簾を本山の張ぬきにするやら、  
太夫も出語りをするやら、例へば人  
形にしてからが先づ眼が動き、指先  
が動き、享保の末には竹本座「大内  
鑑」の與勘平彌勘平が腹をふくらま  
し、元文になると豊竹座「武烈天皇

織」の佐手彦の眉を動かしてはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の暗業を示して以來さいふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭』の人形に始めて帷子衣裳を着せる所か、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黒縹子の前帶淺黄の綿帽子を着せさせた如き、今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時代さいふものは操盛心を極めて歌舞伎はあれど無いも同然、帷は林立

して其最負は凄まじい有様であつたさ云ひます。江戸にて矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てからさ云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の真似のみ演つてゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になるに漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたさ見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他大夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人権村文樂軒が大坂高津區に權を起したのに始まり、一手中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが、大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四少橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座きり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます。次第で御座ゐます。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛などもですが然し南水漫遊などを見るに別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴さありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があること云ひます。兎もあれ昔相座や『薄雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振

袖始』から出た人形だぞ申します。それから若男といふのは源太さと呼んでゐるさか聞きますが持役として『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめるさ『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをなさるさ云ひます。又所謂おやまの中にはおむすさ云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染、『壺坂』のお里、『妹背山』のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城さあるのも多分のご同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。





道行戀の小田巻

前 妹脊山婦女庭訓

道行戀の小田巻

織七上使の段

姫戻りの段

金殿の段

おみわ 橋姫 女

ッ

- (豊竹つげめ太夫 竹本南部太夫 竹本小春太夫 竹本源路太夫 豊竹綾太夫 豊竹辰太夫 豊竹千駒太夫 竹本陸路太夫 豊竹長太夫 竹本文字榮太夫 竹本佐久太夫 豊竹駒司太夫 竹本隅壽太夫 竹本好太夫 竹本土佐子太夫 竹本越名太夫

この淨瑠璃は明和八年(百六十一年前)の初演で全曲五段から成てゐます。作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南の合作で三好松洛が後見してゐます。

全曲の筋は藤原鎌足の子淡海が姿を窺して烏帽子折求女となつて入鹿を滅さんとし、獵師芝六、漁師鱧七の働きよ、橋姫、杉酒屋のお三輪の犠牲によつて目的を達すさいふ運びであります。

求女の風流な姿に戀焦れて入鹿の娘橋姫は執心である。杉酒屋の娘お三輪も求女を淡海さしらず戀慕ひ求女にもくからず思つてゐる、しかし求女は入鹿の持つ寶劍を奪取らんが爲めに橋姫の裾へ緒環の糸をつける。お三輪はまた思ふ男の求女に緒環の糸をつけて互に心さきめかした戀の緒環をたぐりくつて三笠山入鹿の金殿へさ後をつけて行く、入鹿大臣の金殿では多くの官女近侍を集めて酒宴を催してゐる、こころへ流し師の織七が鎌足の使となつて尋ねて行きその不敵の態度に驚かせ、官女の色仕掛けの毒酒にも乗らず鎗襖もびくこもせぬ豪膽さに入鹿を弱らせ人質結構と思ふ所存のあつて奥殿へ引かれて行く。求女のあさを追ふて

人形

橋  
鳥帽子折求女  
娘おみわ

桐竹紋十郎  
桐竹政十郎  
吉田文五郎

豊澤仙糸  
野澤吉彌  
竹澤團六  
鶴澤芳之助  
鶴澤友若  
鶴澤寛市  
野澤吉左  
竹澤團二郎  
野澤吉貞  
野澤市之助  
鶴澤道造  
豊澤清三  
野澤吉季  
鶴澤友丸

来たお三輪は金殿のあたりへ辿りつ  
き豆腐の御用から今宵この大臣の  
お姫さまと尋ねてゐるいゝ男の婚禮  
があるさ聞かされ氣も心も宙に御殿  
へたづれて入る、お三輪の目なれぬ  
風情に多くの官女達は面白がり、懸  
つてやれよ、婚禮の場所へつれて行  
てやるからと馬士唄や竹に雀の唄を  
唄はせたり散々なぶつたあげく皆々  
振りほどいて奥殿へ入る、お三輪は  
怒の眼色するごく求女への嫉妬に燃  
えたつ心は夜及となつて奥殿へ突入  
らふとするところへ鑢七が現はれ呼  
こめられるが、きかぬ夜及は遂に鑢  
七の及にかゝつて斬られる、鑢七の  
金輪五郎は身の素性を言ひ聞かせ入  
鹿を殺さうと忍び入つたが、折角笛  
は手に入ながら濺ぐ生血がないため

困てゐた處、お前に逢て、これで本  
望が送げられる、それもお前の思ふ  
戀男求女の實は鎌足公の長子淡海様  
のためになる事ださ聞かされ、かゝ  
る高貴のお方さ假にも契つた身の幸  
せを思つて死んで行く、鑢七はお三  
輪の生血を笛に濺いで何なく入鹿を  
笛の音に寝むらせ機を狙つて打亡す  
さいふ豪壯の裡に熱涙溢るゝ筋合で  
あります。

(床本) 道行戀の小田巻

常闇の夜々毎に通ひてはまた歸  
るさの道もせきもせそれも何故戀故  
にやつるゝ所体はづかしと佛隠す  
薄衣につゝめと薫り橋姫、思はぬ  
人を思ひ詫心のたけをくゞげどもつ  
れなき松の下紅葉こがれてたへんた

まのをも殿故ならば捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男も置手拭で忍び忍びの出あいづま晩にござらばナコレのんやほんにさ春戸の柿の木の枝こへて連理を契る言の葉はそれも戀中爰はまた箸中村よ一もつの長者も後さ名にひひく釜が口をも出放れてあゆむにくらきくれ竹のしげれる中を分行ば葉毎の露がほろくさほろく打なる雉子の聲思ひくらべていさッ猶心細野に立つくすにくやかッしにおどさるゝわれが姿に又おぢてはつこ立行羽風につれてちりくちるや柳本流るゝ水に裾ぬれて物思へこや帯さげの里羨し自はついに一度の情さへないて身をしる涙雨ふるの社の御燈の影が松の木の中にちちちま見へつ隠れつ歸るさの後を求女

がしたひ来て互にはたさ行合の星の光りに顔と顔ヤア戀人か何故に爰迄後を追鳥はもしや埒の契りをも叶へてやるさのお心かご胸にはいへど詞には面はゆぶりの袖几帳なるほごせつなる心ざし仇に思はじさりながらさほごこむるゝ戀路にて晝をば何さうば玉の夜斗りなる通ひ路はいさふしんなり名所を聞いたる上はこなたより二世のかためは願ふ事明させ賜へさひたすらに問はれて實にも恥かしものもつて餘れる憂身の上語らにつらき葛城の嶺の白雲有ぞこもさだかならざる賤の女と思ふて深い疑ひの雲を晴して、自も思ひも晴らして賜はらばごんな仰も背くまいたさへ草葉の露霜と消ても何のいさやせぬこれ程思ふに胸慾なごけぬお前のお心は

餘りむすぶの神様を祈り過したさかめかやつれなの君やご恨詫思ひ亂るる薄かげそれとお三輪は走り寄り中を隔てゝ立柳立退く秋引さめエ、聞へませぬ求女様ソリヤ氣の多い悪性なそもや二人が馴れ初めは始めて三輪の過し夜に葉ごしの月の傍はお公家様やら侍様やらしれぬ形ふりすつきりさ水際の立よい男外の女は禁制さしめてかためし肌と肌主ある人をば大膽な断りなしに惚るさばごんな本にもありやせまい女庭訓躰方よふ見やしやんせエ嗜なされ女中様イヤそもじ逆たかちれのゆるせし中でもないからは戀は仕がちよ我殿様イヤわわたしがイヤわしがさゝのに縋りつ手を取て園に色よく咲草時は男女になぞらへいはゞ言はれぬ物

鑾七上使の段

竹本貴鳳太夫  
豊竹富太夫

野澤八助  
豊澤廣太郎

竹本大隅太夫  
鶴澤道八

人形

荒卷彌藤次 吉田光之助  
宮越玄蕃 吉田玉徳  
入鹿大臣 吉田玉次郎  
漁師鱧七 吉田榮三  
官女大ぜい

か夕顔の梅はものゝふ櫻は公家よ山  
吹は傾城杜若は女房よいろは似た  
りや菖蒲はめかけ牡丹は奥方よ桐は  
御主殿姫百合は娘ざかりさなでしこ  
のサアなるぞへくなるさならずさ  
なら坂や兎手柏の二人の女にらめば  
にらむ萩さ萩中にもたるゝ男べし放  
ちはやらじと縫り付こなたが引ばあ  
なたがさめ戀の柵蔦葛付まご  
はれてくるくく廻るや三つの小  
車の花よりしらむ横雲のたなびき渡  
りありく三笠の山も程近く鳴鐘  
の音におどろく姫歸る所はいつくぞ  
さ求女が氣轉振袖の端にぬふてふ取  
りかばす縁のおだ巻いさしさの餘つ  
て三輪も悋氣の針男の裾に付る共し  
らずしるしの糸筋をしたひしたふて

(床本) 鑾七上使の段 (前)

にこそ控へ居る 花にくらしし月にあ  
かし、酒池の遊びに酔つかれ御殿御  
殿の通ひ路も數多の官女が道樂に君  
の機嫌を鳥甲調ぶる笛や箏ひちりき  
大鼓の音も鶏徳に己が不徳を押昇る  
雲間の深縁蜀錦の袴の上、むんづ  
ま座せし有様は實類ひなき榮花の殿  
玄蕃彌藤次頭を下先達て吟上雲客  
達より君の壽を祝し申されし敷の嶋  
臺ソレ女中方觀覽に備へられよアツ  
トこたへて持出る思ひくの笥り物  
何かな君が壽を祝ふ鶴龜、松竹の影  
は千尋の深縁松と鶴龜合せて見れば  
一萬二千の齡を君に譲り壽く蓬來山  
扱また次の嶋臺は周の帝の妾、假  
の情の弟草げに寵愛の色菊や葉毎を

染し其筆の命毛長き八百歳老せぬや

所へ

へしてごんしたお公家殿、鎌きりの

く薬の名をも菊の酒くめ共盡ぬ泉

(床本) 畿七上使の殿 (後)

大身から雇はれて来たつかいでごん

の壺天上人の方々より御祝儀なりと

榮る花も時し有はずがり嵐の有ぞと

すといふて遙に見おるす入鹿ハテ心

相述る一入鹿に悦びチ、百司

は、いざ白雲の御座新に造る玉殿は

得ぬ其鎌足め首陽山の昔を學び後を

百官より萬民に至るまで我在位長か

彼唐國の阿房殿爰に寫して三笠山月

隠せしと聞しに扱は難波の浦に有け

れと願ふこそめいゝが身の冥加な

も入鹿が威光には覆はれますぞせひ

らざる處なければ今日まで飢にも臨

れば猶萬歳を唱よそ高慢我慢の詔

なけれ物もふ頼みませうごどつてう

ます堅固におりしは我惠ならずやそ

り、はつと兩人階下にひれふし我々

聲撥鬢、天窓の大男、御殿早近くほ

れを思はじさくにまぬり恩を謝すべ

は申すに及びず民百姓も野に手を打

つかくく着たる木綿の長上

エ、それおれが知つた事かいの、か

て舞樂しむ誠に月ささぬ御代と申す

下糊しやきばつて、立はたかりエ、

ふ見た所もよつほど短氣者じやはい

は今此時に候と、めつたに追従狸々

入鹿殿は爰じやな、内にならあはし

の、しかし喧嘩はこなんのやうに、

の人数に見され官女達コレ、此狸

て下んせ木で鼻こくるむくつけ詞

こつきで行のがマア徳じや、鎌殿も

々が手にもつた酌盃もとりはづし壺

宮越荒巻目に角立ヤア何奴なれば君

一旦は言がりて、てつばつて見よ

には誠の造酒をたへた、これで御

の御前共は、からぬ馬鹿者め、すさ

ふと思はれたそふなが叶はぬやら、

酒宴始めふか、いかさまそれはよい

りおらふとさめ付る、イヤおりや、

ごぞおれに挨拶してくれて、そ

おなぐさみ、サア、早ふと取々に

難波の浦の鱈七と言ふ綱引でござん

れば、きつよいはりの、たいが

手まづさへぎる盃の廻れや、萬代

すが、いつぞやからこちの方へ宿が

いの事ならもふ了簡してやらんせ、  
れんごろな中は得て心安立て間違か  
有物じやてのふ、コレ仲直りの印じ  
やて、きす一升おこされた、さ刀  
の提緒にぶらぶら結びし徳利にき  
つこ目を付いまだ日本一渡らぬ兵器  
唐土に有と聞く飛道具の類ひ成か、  
何にもせよ、怪しき物を所持せしぞ  
よ方々油断致すなと眉をひそめて、  
身構へたりエ、さつけもない、徳利  
と見やんせ酒じやくコレそこなお  
手代衆、早ふコレそれ、しんぜさん  
せ、イヤ善悪しれざる鎌足よりさ  
し上し酒ならば毒薬仕込あらんもし  
れず奉る事罷ならぬ、エ、まはすは  
くドレおれが毒味してやる、茶碗  
はないかへ、そんなら赦さんせ直や  
りじやま言つゝ徳利の口から口チ、

よい酒じやにな、是を呑ぬといふ事  
が有か知ぬと、ふつて見てヤアく  
南無三皆吞でしもたエ、ひよんな事  
して退たヤコレひよつと鎌殿にあは  
んしよさまよおれが呑だといはず  
に、よふ屈たと禮いふて下さんせや  
と我武者な様でも正直者、まじめに  
成て氣の毒顔、エ、まだ何やら言傳  
つて来たむ、落しはせぬか懐さむ  
しヲツト有はサアは見やんせと一通  
を渡せば彌藤次押開きナニく我不  
肯たるによつて暫し心を惑はすと言  
ども今一天四海御手の内に落入事正  
しく天の譲り賜ふ萬乗の御位、入鹿  
公に背くは天に背くと同じこと、先  
非を悔て爰に降参を乞ふなり、今よ  
り臣下に屬するの印君の齡を東方朝  
に譬へ此桃花酒を以て御壽を祝し

奉る内大臣藤原の鎌足謹で申す  
と讀上るハ、なまくら者の鎌足の臣  
下さならんなんご、はイヤしらく  
しき偽りやつ、何じや、鎌殿をうそ  
つきとはなんぞ造な證據がごんすか  
ヤアわざかしき證據呼はり、彼が心  
腹いふて聞そふ、ドレ聞ませうか、  
先此入鹿を東方朝に譬たるが野心の  
證據そ、りや又なじよにチ、昔、漢  
の武帝が代に東方朝といへるやつ三  
千年に一度實の作る桃を三度盗でく  
らひし故九千年の齡をたもつ、桃に  
百の縁をかたどり、百しき百官を手  
に入し此入鹿を盗人なりと言ねばか  
りの底工み憎いやつと居天高、ア、  
イヤくそりや無理じやくヤアラ  
ち虫め、何を知てこしやくやつ、イ  
ヤ何にもしらんげ、かはりになつ

て来たおれじやによつて、一番言の  
 じや、チ、鎌足が、はりならば是を  
 もかはりに心見よと、傍なる嶋壘追  
 取て眉間へはつしと打つける、壘はみ  
 ぢんに飛ちれど、びく共動かず、ア  
 いよいかげんにだゞけさしやれ、其  
 死損ひの代物東方朝とやらに替たご  
 いふて業わかすのか、年にあやから  
 んせそこそ書ておこさしやつたれ、  
 盗人を書ちやないぞや、それにそつ  
 ちから色々の講釋を付て盗人せんさ  
 くしつた同士はすしい、さやらで  
 盗人の覺が有かして、今の投打ア、  
 こなんは正直な人様じやと世間の噂  
 見ると聞くまで大きな違ひ、マアそ  
 んな盗人と鎌殿を懇にはおれがさす  
 まいはいの、仁体にも似合ぬ事さん  
 すの、よもやそふじや有まいがの、

但覺がごんすかイヤそふかいのこ  
 文盲だらけも理屈は理屈、ごふでこ  
 はるさやり込れば、邪智の入鹿もに  
 が笑ひ、ハテ口がしこくいひまげし  
 な、ういやつ出かした、其褒美には  
 鎌足が實否を正すまで儂は人質、最  
 早籠中の鳥同然、歸る事はならぬこ  
 思へ、ヤア、玄蕃彌藤次いざ萩殿  
 にて天盃を廻らさん、來れやつこ引  
 連れて帳臺深く入にけり、アコレ  
 おれを質に取しやるご、着物や道具  
 と違ふて代物がめしくふぞや、併し  
 あの業腹では大抵で喰しおるまい、  
 ナ、すき腹に今の酒でよつほど酔が  
 來たはい、ドリヤごこなご一寝入や  
 つてこまそそ伸上り、エ、腰がおも  
 ひ苦よ此大小、らつしもないものさ  
 としておこしてあた面倒なご椽板へ

ぐはたりと鳴は相圖かそ突出す鐘は  
 篠薄、構はすころり臂枕、不敵なり  
 ける男なり、御所より外は咲き出ぬ  
 若きこだちが入かはり、男見にくる  
 あいそにはお茶よお菓子よ煙草盆、  
 銚子かはらけ持て出、コレそな人は  
 なに御用でお召寄有しは知れど、さ  
 ぞ待久しう氣もつきやう、九献一つ  
 ミ指置ば体寝がへり腹遣に、ほう杖  
 つく、打認めフン貴様達は誰じや  
 ナ、我々は上様の身近く召るゝ女ご  
 も、何じや短い女子じや、ドレ、  
 成程、これも是もよふにへ込だ物  
 じや、わいらは爰な飯焚じやな、テ  
 モけぶな前垂して居るな、エ、つが  
 もないざればみ事、わしらをさやる  
 そなたの名はチ、ふか、何ふかさは  
 ハテ商賣の夜網に出入りや、沖でも磯

でも行あたりによふ寝るゆへにふか  
七さいふ漁師くヤア料紙さはん  
ぞ書てたもるのが、それならば必  
繪や歌はいやじやぞや、今難波津で  
持はやす歌舞伎芝居の其中でもよふ  
聞及んだ文七八歳の紋ならば書てほ  
しいさしどもなき櫻の局摺寄てそふ  
して下くも皆そなたの様な男かや  
能男もたんと有である、地下の女子  
は羨しい、芝居は見次第、よい男は  
持次第、ほんにまた此御所女には何  
むなる、見るもく冠装束、窮屈  
で急な逢瀬の其場でも衣紋の紐よ、  
上帯よ解かほごくか大抵では下紐ま  
では手がとやかすついで其内には花に  
風月に村雲さわりが出来てほいない  
別れをするはいのさいふさへ顔に紅  
葉の局、中將や少將あたりで戀すれ

ばあのおいかげが邪魔に成、尻目づ  
かひは出来ぬく、其上格氣いさか  
ひもこつちからは槍扇で叩けばあつ  
ちは笈で留つづばり、かへつていき  
つたばかり、いらほても見ぬ、逆鉦  
の軍情も受て見ず、しんきくでく  
らそよりいつその事に玉の緒も絶な  
ば絶たがまして有、もしもやさそふ  
水しも有ば逝たいはいのこ鐵七にひ  
しと二人はいだき付、恠りはいもう  
業にやし、エ、けたいいなげんさいめ  
ら、あつちへきりくうせあがれさ  
けんもほろくに言ちらされ、さつて  
もすげない戀しらす、玉の盃底抜男  
不骨ものよと、不興してほいなく奥  
へ入にけり、あたり見廻し長柄の酒  
庭の千草にさらくそとぎかくれ

ば忽に染たち變じて枯しほむ、ハ  
ハ、フ、ハ、最前の鎧さひ又候や  
此毒酒、ハレヤレきつい用心さ猶打  
見やる庭先へ弓さ矢つむひばらく  
く追取かこませ、宮越玄蕃、いか  
にしても心得ぬつら魂尋れ問べき  
仔細有ば引立てよこの論言なるぞ、  
早くまゐれチ、呼にこんせいでも行  
のじや、假初にもびくくこちよつ  
こでもさばるがいな、こし骨、踏折  
り、せんきの虫と生別れ、さすぞ、  
ヤコレ家來共さん、わり様達も其鳥  
おどし放す、最期とつつかまへて骨  
引抜、かたはらからめたにするぞ、  
やどりや、おれから先へ行やんしよ  
と事共思はぬ大膽もの、胸の強弓矢  
襖を引明てこそ入にける、



姫戻りの段

床本 姫戻りの段

豊竹つげめ太夫  
豊澤 仙糸  
竹本南部太夫  
野澤 吉彌

人形

橋 姫 桐竹紋十郎  
烏帽子折求女 桐竹政 龜  
官 女 大 ぜ い

されば戀する身ぞつかや、出るも入も忍ぶ草、露踏分けて橋姫すこすご歸る對の屋の障子にばらり打礫、ソリヤお歸りのしらせぞごめい／＼庭につごひおり、しをり開いて入まゐらせ、おいさしや／＼御所のお庭の内さへも、ついにおひろひなされぬに、戀なればこそ徒はだし、嘸朝露でお裙も濡ん、小打着に召せかへんさ立寄てヤアお振袖に付て有る此紅の糸不審さたぐり、たぐればく

入り遊ばしたサア／＼こちへと手を取ばイヤ手前はつい道通り此おだ巻を拾ひ上るやいな、めつたに引れ参つた者、何にも存ぜぬお赦しこ出る向ふを立ふさきエー手のわるいなされ様わたしらに御遠慮は内々のお咄しなら、ざりやお次へこ立て行く、姫はさかうの詞なく差うつむいて、思案の求女、フン此御所の姫さあれば聞に及ばず入鹿の妹、橋殿さ、いはれて、はつこ胸せまり、入鹿が妹さ知り賜はば、よもお情けはあるまい、と、隠し包みし、かいはなふ、御存じ有しお前こそ、藤原の淡海さまさ、いふ口ちやつこ秋に覆ひ女なれど敵方に我名を知は一大事不便なれど助けわたし、成程お道理御尤、生て居る程思ひの種お手にか

金殿の段

竹本土佐太夫  
野澤吉兵衛

人形

官	漁師	豆腐の御用	娘おみわ
女	鱧七	吉田小兵吉	吉田文五郎
大	吉田榮	吉田小	吉田文
ぜ	三		
い			

かるがせめての本望、かふいふ内もお姿やお顔を見れば輪廻が残り、サア、殺して下さんせよ、及を待たる覺悟の合掌、フン心底見へた、誠夫婦となりたれば、一つの功を立られよ、一つの功を立よこはへ、入鹿が盗み取たるこそ、三種の神器の其一つ、十握の御劔はひ返して渡されなば望の通り二世の契約、得心なれば叶はぬ縁、ハアゼひもなや、悪人にもせよ兄上の、目を掠むるは思しらず、さあつて、お望叶へれば夫婦と思ふ義理立す、恩にも戀はかへられず、戀にも恩は捨られぬ、二つの道にからまれし、此身はいかなる報ひぞこ、忍び歎いておはせしがチ、そふじや、親にもせよ、兄にもせよ、我戀人の爲さいひ、第一は天子

の爲命にかけて、仕おふせませふチ、出かされたり、シテ又しらせの相圖はなんさ、今宵御遊の舞に事よせ寶劔奪ひお渡し申さん、笛や鼓の音をしるべ奥の亭までお忍び有れ、しからば我は此所にくるゝを暫し待合さん、かならず首尾よふ合點でござんす、がもし見つけられ殺されたらこれが此世のお顔の見納め、醫死でも夫婦じやさおつしやつてくださりませ、チ、運命咄く事あらはれ其場てむなしくなるまで、盡未來際かはらぬ夫婦、エ、忝い嬉しやこ、いだきしめたる鴛鴦の、つがひし詞縁の綱引別れ、

(床本) 金殿の段

迷ひはぐれし片鶉車の塵をしるべに

ていきせきお三輪は走り入エ、此小田巻の糸めが切れくまつたはつかりで道からさんに見失ふた、さりながら爰より外に家はなし大方此内へ這入たに違ひはないエ、誰ぞよかし問たやま見やるさきよりお婢が被まぶかにしやなくと豆罎箱提げ歩み来る申申しと呼かくればヲツト呑込早合點チ、お清所を尋るならそこをこちらへかふ廻つてそつちやの方を

あちらへ取あちらの方をそちらへ取る方へ這入て左の方を眞直に脇目もふらず、めつたやたらにすつと行きや、ア、イエ、私か尋るのは其お清殿さやらではござんせぬ、年の頃は廿三四で色白にくつきりとしたよい男は参りませなんだかへチ、来たげなくそれはお姫様の戀男じや

げなの、三輪の里から後追て来た所を何かお周達か引さらへ有無を言せず御殿所へぐつと押込上から蒲團をかぶせかけ、ア、く、宵の中内證の御祝言がある筈さくれぬ中から騒いでじや、エ、けなり、こちらまで内股太がぶきく、と卯月あたりのはちき豆、さうふの御用も急ぐにさしやべり廻つて出て行くサア、く、ひよんな事が出来て来た、ほんにく、油鬮もすきもなるこつちやない、大それた人の男を盗くさつて何じやいし、こらしい内祝言じや、餘りな踏付様よい、其かはり、ごにに居よふと尋出し求女様と手を引て是見よがしに逝でのけるが腹いせじやさ行んとせしむイヤ、く、はしたない者じやさひよつとあいそを盡さ

れたら、こいふて此儘に見捨てこれがごふ遊れふエ、ごふせふぞと心も空登る階、長廊下行かふ女中が見咎て、一人が留れば二人立、三人四人いつの間、友呼千鳥むらぐと爰かしこから寄たかりついし見馴れぬ女じやが、そなたはマア誰じや何者じやハイ、イヤ私は内方のチ、それよさつきのお清殿とは寺友達奉公に出られてから久しう逢ぬなつかしさちよつと見舞に寄ましたら是はまあくよふ来た上れ茶茶香をふしてたばこ香、アノお上にはあためつそふな御祝言があるを聞け聞程涙がこぼれてあたのお目出たい事じやげな、ほんに内方のよふなよい衆の御祝言はどの様なものじや、儂れやれ、拜んでなりと、腹いよさうかく爰まで

まゐりました。ごふぞお前方のお心  
で其御様をちよつと拜まして貰ふた  
ら添ふござりまするごいふ顔も恨色  
成紫のゆかりの女ご早悟、なぶつて  
やるご目引袖引マア、そちは仕合  
な斯いふ折に参り合お座敷拜むごい  
ふ事は女子の身では手柄物、したが  
こちらが呑込でお座敷へは出す物の  
何ぞさ、すば成まいに何ご皆様いつ  
その事此者に酌取そでは有まいか、  
よかるくア、申し其酌さやらはナ  
、何の又、そち達が知てよい物か今  
爰で教へてやる、幸ひ爰に御酒宴の  
鏡子鳴壺、有合の御君様には紅葉の  
局、梅の局は嫁君役、残りは介添侍  
女郎と櫻の局が差圖していやがるお  
三輪に長柄の鏡子持せ持添、マア盃  
は三ツ重、嫁君へ二度ついで左へ二

足、コレ立のじやはいのくエ、何  
じやぞいのふ、うかくせすまよふ  
覺や三度目ついで御君へア、コレ酒  
がこぼれるはいの、不調法な、是か  
らが亂酒調ひ物、是も嗜みなければ  
ならぬ、サアく四海波なご調やい  
の、エ、くこはいやか、そんな  
ら御様拜ます事はマアならぬ、サそ  
れがいやなら早ふ調やこせつき立ら  
れはマア何ご千秋萬歳の千箱の玉  
の血の涙聲つもらせて、泣じやくり  
チ、目出度衰れに出来ました、色直  
しにはんなりご梅が枝でも露組でも  
サアく聞たい所望じやくエ、あ  
られもない事おつしやりませ、山家  
育の藪鶯、ホウ法花経も片言ばかり  
登り下りの仇口や馬士の唄なら聞て  
も居よふ、もふ何事もお教しなされ

サ早ふ其御様を、サア御様か見たく  
ば早ふ調や馬士の唄なら面白からふ  
ついでにふりも立て仕やいやならこ  
つちもなりませぬサ、歸りや歸り  
やご引出されサアく、何のいや  
ご申ませふぞいのサアそんなら調や  
アイくく調ひまするご泣くも  
涙にしぼる振袖は鞭よ手綱よ立上り  
M 竹にさ雀はナア品よくこまるナ  
アごめてサア留らぬナ色の道かいな  
に申まするご打伏ば皆々一度に手を  
打て扱もきつい、嗜事、よい慰み  
我々がほつてつ腹までよれました、馬  
士殿太儀ご言換て行を驚きコレ申し  
私も俱にご取組れど、振放されては  
がはごこけ、寝ながら裾にしごみ付  
引すられて聲を上げノウ皆様お情ご

ふぞ私も御一緒に連れてござつて下さりませ、お慈悲〜と手を合せ拜み廻るを擲き退けチ、しつこ、逆も及ばぬ戀争ひお姫様と張合ふさは叶はぬ事じや、置てたも大膽女の仕付をせふと耳を引やら臨明より手を差入れてこそぐるやらつめりつ擲いつ突倒しサア〜是で姫様の悋氣の名代納つたいよ〜目出たい御祝言三國一じや舞を取濟した、しやん〜しやんと濟だぞ打笑ひ局々へ入る後は前後正体泣倒れしげし消入居たりしがエ、いふよくじや〜いふよくじやはいの、男は取れ其上にまだ此様に恥か〜され何ぞこらへて居られふぞ、思へば〜つれない男、憎いは此家の女めに見かへられたが口惜い袖も秋も喰裂〜亂れ心のみだ

れ髪口に喰しめ身をふるはせ、エ、嫉ましや腹立や儂おめ〜寢さそふかご妾心もあら〜しく、かけ行向ふに以前の使者チ、そなたも邪覺仕に出たのじやな、もふ斯なつたら誰が構はぬ〜そ退や袖すり抜てかけ入襪しつかと踏へコリヤ待て、女、イ、ヤ待ね、爰放しや放しや放しやご身をもぐ、巻つかんで氷の及、臍腹ぐつこ差通せば、うんこのつげに倒れ伏す刀を突捨邊りを窺ひ目を配る奥は豊に音楽の調子も秋の哀れなる、お三輪はむつこ起返り扱は姫が言付じやな、エ、むごたらしい、うらみは、こちら有物を返つてそちから殺さする心は鬼か蛇かいやい、チ、殺さば殺せ一念の生かばり死かはり付まどふて、此恨晴い

で置ふか思ひ知れやと奥の方覗みつめたる眼尻も叫ぶ聲音もうはがれてさもいまはしき其有様じろりと見やり女悦べそれでこそ連れ高家の北の方命捨たる故に寄り、汝が思ふ御方の手柄となり、入鹿を亡す衛の一つチ、出かしたなや何と賤しい此身を北の方さば、ホ、そちむかたらひ申せし方は忝なくも中臣の長男淡海公エ、シテ又私か死るのが、いさしいお方の手柄さ成て入鹿を亡す衛さば、ホ、ホ、ホ、ホ、其譯語らんサよつく聞け、彼が父たる蘇我の蝦夷齡傾く頃までも一子なきをうれへ時博士に占はせ白き女鹿の生血を取母にあたへし其驗すこやかなる男子出生、鹿の生血胎に入を以て入鹿を號け去るに寄つて、きやつが心を

さらかすには、爪黒の鹿の血汐と疑着の相ある女の生血、是を混じて此笛にそゞぎかけて、調ぶる時は實に秋鹿の妻乞ふ如く自然の鹿の性質あらはれ色音を感じて正体なし、其虚を計つて寶劍を過なく奪返さん餘足公の御計略、ものかげより窺ひ見るに疑着の相ある汝なれば不便ながら手に掛しと件の笛の六穴に、たばしる血汐、請そゞぎ、今こそ捕ふた此幻術此笛こそは入鹿を挫火串ならん、ハア、くく有がたやと押戴き勇み立たる其骨柄實に藤原の御内にて金輪五郎今國と鍛へに鍛へし忠臣也、ノウ冥加なや勿体なやいかなる縁で賤の女がそふしたお方と暫しでも枕かばした身の果報、あなたのお爲になる事なら死でも嬉しい忝

いこはいふものゝ今一度ごふぞお顔が拜み度い譬此世は縁薄くさ未來は添て賜はれと、はい廻る手におだ巻の此主様には逢れぬかごふぞ尋て求女様もふ目が見へぬなつかしい戀しくご言死に思ひの玉の糸切しおだ巻塚さ今の世まで、なりひききたる横笛堂の因縁斯と哀れ也、今國不便彌増てせめて葬り得させんと春なにお三輪が亡骸を追々馳來るあらしこ共、曲者やらぬと取巻たり、ヤアしほらしき蚊蚋蚋めら、一々勝負は面倒なり、一度にかゝれと力士立、ヤアにつくき廣言打取れと前後左右に十文字鎧先揃へて突出すを、取ては投げすへ、叩き伏せ砂石の如くほり飛され逃行やつばら餘さじと奥深くこそ追て行く、



### 河庄の段

### 中心 中天網島

### 河庄の段

近松門左衛門一代の傑作淨瑠璃で享保五年十月十五日の明け方網島大長寺で情死を遂げた小春治兵衛の件を

中 豊竹本綴太夫  
切 竹本津太造  
鶴澤綱太造

### 人形

紀の國屋小春 吉田文五郎  
紀の國屋仲居 吉田兵次郎  
女郎白菊 吉田覺三郎  
河庄女房 吉田玉七  
江戸屋太兵衛 吉田小兵吉  
五貫屋善六 吉田市次郎  
粉屋孫右衛門 吉田玉次郎  
紙屋治兵衛 吉田榮三  
河庄亭主 吉田文之助  
見物人 大田之助

中物の白眉と稱されてゐます、妻子ある紙屋治兵衛は男五左衛門への義理立から身代も傾き世間の手前自身茶屋酒に倒産した体に見せかけるために茶屋に入込だのが病付て小春と馴染み、家を外の放埒に、貞女のおさんの義理繩の忍び泣きに見兼ねた兄の孫右衛門が侍姿に身を扮して河庄へ乗込小春に打明けて別れてく

れこの頼み、小春はおさんよりの手紙に愛を義にかへて、治兵衛にあらぬ愛想づかしを言ふ、義理と義理の言葉こぼしらの治兵衛は魂抜けて孫右衛門に連れられて天満へ歸るこいふ義理と恩愛の細に絡まる涙の一曲であります。

### (床本) 河庄の段 (中)

よれが情の庭深き、是かや戀の大海を、かへもほされぬ蜷川 思ひくの思ひ歌、心がこゝろさむむるは、門行燈が文字が關、浮れぞめきの仇淨瑠璃、役者物まれ流行歌、二階座敷の三味線に、引れて立寄る客もあり、紋日遅れて顔隠し仕過ごしせじ忍び風、橋の名さえも梅櫻、花をそるへし其中に、南の風呂の浴衣

り、今の新地に懸衣、紀伊國屋の小春とは、此十月に仇し名を、世に殘せとの印かや、今宵は誰が呼子鳥、覺束なくも行燈の影、往來ふよねの立留りや、小春様のなんごいの氣色も悪いか顔も細り、いこふやつれさしたのふム、ほんに誰やらが咄で聞ば紙治様故内はらたんご客の吟味にあはんしてごこへもおささは送らぬのイヤ太兵衛様に請出され在所ごやら伊丹ごやらへ行んす答共聞及ぶがごうで御座んすア、モ伊丹くごいふて下さんすな、夫ではいたみ入るわいなアいごしぶなげに紙治様と私か中左程にもない事をアノせいこきの太兵衛めが浮名を立てのいひちらし、客ごいふ客は退果、入からは紙屋治兵衛故ちやごモせく程に、

文の便も叶はぬ様に成やした、ふしきに今宵は侍客で、河庄方へ送り、が、斯う行く道で若し太兵衛めに逢ふかご氣遣ひさ、ホンニもう敵持同然の身持ちやわいな、ム、そんならちやつごはづさんせ、アアレく一丁目からのんに髮結てののうしい立衆自慢さいひそふな男たしかに太兵衛様ご見た、アレく爰へさいふに小春はム、すかん、コレ中へ往來にまぎれ人連れすにわしや河庄へ行ぞへム、よかるく爰へ太兵衛様ご見たらばわしがちよつぼくさ、サアくこの間に行かじやんせご、お、ひに成たる其隙に人立紛れにちよこく走りごつ河内屋へ駈け込めばム、これはくマアく早い

お出ホンニお名さへ久しう云はなんだに、ヤレく珍らしい小春様はるくで小春様と、主の花車が勇む聲ア、コレ門へ聞える高い聲して小春くごいふて下んすな、表へいやな毛虫客が来るわいな密にく頼やすと、云も洩てやぬつご入来る、二人連アイヤコレ小春殿、毛虫客さはい名をつけて下んした、先おれから云ませふかい、ヤコレ善六我も知つて居るこの小春頓て太兵衛が女房に持か又紙屋治兵衛が請け出すか張合の女郎ちやマア近付になつておきやごのさばり寄ればエ、聞ごもないくくえしらぬ人の浮名を立て手柄にならばせい出して云はんせくこの小春は聞ごもないご、つひご廻れば又摺り寄ア、コレ、聞ごもなく



共へい、小判の響で聞せて見せふ、  
 が又貴様もよつぽご因果者じやわい  
 天満大阪三郷に、男も多に紙屋治  
 兵衛二人の子の親、女房は従弟同士  
 舅は伯母、あいに、に間屋の仕切さ  
 へ道る、商賣夫れにまあ十貫目近い  
 銀出してイヤ請出すのヤ根引のさは  
 ソリヤコレ蠅螂む斧でござりやすて  
 ハ、い、其様な男もつぱり可愛  
 ござりやすかイヤサお前は治兵衛様  
 が可愛ふござりやすかいな、我等女  
 房子なれば舅もなし、又伯父も持  
 たすへい、身すがらの太兵衛と名を  
 取つた男色里で儲上いふ事は治兵衛  
 めには叶はれ共ハテモ銀持た計は太  
 兵衛がまさつた、銀の方で押たらは  
 ノウ善六何に勝ふも知れまいわい、  
 今宵の客も大方治兵衛めぢや有ふサ

アもらなをくく小春はこつちへも  
 らをチ、此みすがらがもろうたぞ、  
 サア花車酒出しやいのくく、ム  
 何をしやんすやら、今宵のお客は  
 お侍衆、迫つけ愛へ見えませふ、  
 お前はごこそ脇で遊んで下さんせ、  
 ヤ侍客ぢや、侍何ぢやくへい  
 何の刀さすかさ、んか、侍も町人も  
 客は客ぢやわい、何ぼさしても五本  
 六本はさすまいし、よふさして刀脇  
 差たつた二本ぢやい、二本差がこわ  
 いかい、二本差がこわけりやなア  
 田樂屋の門を通れんじやないかい、  
 ハ、い、イヤコレ花車、此頃仲衆仲  
 間のはやり文句、コ、い、小春もよ  
 ふ聞きや、ヤコリヤ善六そこへまア  
 われ覺えた通り、やつて見い、チツ  
 ト承知の助ぢや、やるくが素では

ちつと間がねけてやりにくいなム、  
 太兵衛様、おまはん、するてんあら  
 ふてんか、エ、する天、チ、ヨシ  
 くム、幸こに簿がある、是でや  
 つてやるう、エ、ほうきハ、い、え  
 、三味線ぢやなアドレ、鳥渡拜見  
 のいたそふヨチしゆる胸に竹の丸さ  
 ほさけつかるわい、ハ、い、い、サ、  
 い、皆に聞かすのぢや一ぱいに張込  
 んでしつかりやつて呉れく、ウソな  
 ら一寸調子聞して三味線彈左の方へ  
 すばりんか、ア、わりに不器用な男  
 ぢやなア、エ、何かすぞいサア、  
 早ふやつて呉れ、そんなら一寸調子  
 聞かしてんかチツトこんでるくマ  
 ア一聞かしてんか一を、ヨシソリヤ  
 一じやぞドンくく、御堂様の  
 太鼓のやうな音ぢやなアハ、い、サ

ア二二、二かへ、ヨシ〜ドン〜  
〜ア茶屋の段ばし〜登つてあ  
る様な音ぢやなアハ〜三聞か  
して三をチツト三ぢやなアヨシ〜テ  
ン〜アまるで紙屑屋のお  
んこくぢやがな、てんこいはすさ  
い、〜やりまつせ〜しかし一寸口  
上云ふは口上をエ〜  
東西〜此所にて語りまするは、紙  
屋治兵衛、紀伊國屋小春、つまらん  
菊浮名の蜷川、相勤めまする太夫、  
竹本善六太夫、三味線さぐり澤太兵  
衛様東西〜拍子木チヨン〜  
〜口三味線アメン〜  
〜アメン〜アメン〜アメン  
〜アメン〜アメン〜アメン、結ぶ  
のメンメン〜アメン〜アメン  
ヤアメンアメンアメン、神の紙屑

に貧乏アメン紙屑のンヤ治兵衛の  
女房のおさんに子の有、其子の湯た  
れお末に勘太郎チツトツコイすそ  
貧乏小春に命ちり紙の紙子姿ぞ茶袋  
紙チヤチヤン〜  
善六もふよい〜小春殿、何さよ  
い文句で有ふむの、悪口難口こう  
ゆる小春、門にも忍ぶ侍客物をも  
云はず内へ入、太兵衛が胸ぐら捻ぢ  
上ればアイタ、〜コリヤ何さしな  
る、イヤサ何共せぬが、この大小が  
目にかゝらねば明き言も同然赦しに  
くい奴なれ共、所がら故赦して呉れ  
るさ、こまゝ失ふと突飛されてへら  
す口、エ、思々しいわい〜  
ヤコレ善六是から一遍ぞめて来た  
る、ごこそではナソレ、今の紙屑め  
に逢ふも知れまい、エ、うち〜せ

すみサア来いご身振り計りは男を磨  
く町一杯にはたかつて、打連れてこそ  
歸りける、所柄さて馬鹿者に構はず  
こらへる武士の客、紙治〜こよし  
あらの、噂小春が身にこたへ、思ひ  
くすおれうつさりと、無挨拶なる折  
節に内々走つて紀伊國屋の杉がけふ  
さひ顔付にて、只今小春様送つてさ  
んじた折お客さんまだ見へず、なげ  
マアさつくり見て來んぞ、酷ふ阿ら  
れます慮外なむらちよつと、差覗き  
ム、〜さうでない〜氣遣ひなし後詰  
めてしつぱりさ小春様したる櫛の  
生醬油花車さらば後に宵菜のひたし  
物、口合たらん立歸る、しごくか  
た手の侍大きに不興しコリヤ何ぢ  
や、人の顔を目利きするは、身を茶  
入茶碗にするかアアなぶられには來

申さぬ、此方の屋敷は出入がたく、一夜の他出も留守居へ断帳に付、六ツヶ敷き掟なれ共お名を聞いて戀ひ慕ふたお女郎、何でも一生の思ひ出おなさけに預るうと存じたに、いつかなにつこり笑顔も見せず一言の挨拶もなく、懐で錢よむ様に、扱々うつむいて計りイヤナニ、首筋が痛みはいださぬか、コレ小春殿へハ、ハ、花車殿茶屋へ来て産所の夜とぎする事は、モ終にないすこつぶやけばム、いわくを御存じない故にお腹の立つは御道理、この小春様には紙治様と申す深いお客がござんして、けふも紙治様、明日も紙治様さわかからば手さしのならず外のお客は風の木の葉で、ばらばら登りつめたる揚句には得手怪我

の有る物と、せくはごこしも親方のならひ、夫れ故お客の吟味、おのづこ小春様もお氣の浮かぬばお道理、の中取て主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝心かんもふ、サアごつと舌かけわさくわつさり頼みやす、コレ小春様と云へ共何の返答も涙ほろりの顔ふり上、アノお侍さん同じ死る道にも十夜の中に死んだ者は佛になるさいひますが定かいなア夫れを身がしる事が、ソリヤ旦那坊主にお問なされム、ホンニそんなら問ひたい事有わいなア自害するご首くゝるは定めしこの咽を切方がたんご痛いでござんせうな、ム、痛むか痛まぬか切ては見す大方な事間つしやれア、小氣味の悪い女郎ぢやご道の武士もうてぬ顔コト小春様初

對面からあんまりな、御挨拶ちつと氣をかへ奥で酒に致しませふ、いか様酒は能くござるふヤナニ、小春殿お來やらム、かた、サア小春様、お出いなアコレ奥へお鏡子持つておぢやと、高い調子は合れども引立られて是非なくも打連れ奥へ入にける。

(床本) 河庄の段 (切)

天満に年経る。千早振。神にはあらぬ紙神と世のわに口に乘斗り。小春に深くあふぬさのくさり合たる御注連繩。今は結ぶの神無月堰かれ達れぬ身と成果あわれ逢瀬の首尾あらは夫を二人が最期日と名残りの文の云かわし毎夜く死かっこ。魂抜てさばくうか身を焦す。煮賣屋で小春が沙汰。侍客で河庄方と

耳に入よりサア今宵も。覗く格子の奥の間に。客は頭巾の頭。の。動く斗に聲聞へす。可愛や小春が燈火に脊けた顔のアノ瘦た事わいの。心の中は皆おれが事。爰に居ると吹込で連て飛なら梅田か北野エ、知らせたい呼たいと心で招く氣は先へ身は空蟬の抜殻の格子に抱付あせり泣。奥には客が大欠び。思ひのある女郎衆のお伽でイヤモもんさ氣がめめる。門も靜な端の間へ出て行燈でも見ても氣を晴さふサアござれと連立出ればなむ三寶見付られじと身を忍び隠れて聞共内には知らず。なふ小春殿脊からのそぶり詞の端に氣を付くれば花車が咄しの紙治とやらと心中する心に見たヤサ違ふまじ死神の付た耳へは意見も道理も入まじとは思へど

も去さば愚痴のいたり先の男の無分別は恨ます一家一門そなたを恨み憎しみ萬人に死顔さらす。身のはち親はないかも知れども若しあらば不孝の罰。佛はおろか地獄へもコレマあたゝかに二人連では落られぬヤクア、勞はし共笑止共一眼ながら武士の役見殺しに成がたしコレ定めて金づく。五兩十兩は用に立ても助たし何ぞ死ぬる氣に違ひはあるまいかの神八幡侍冥利コレ他言せまじ小春心底残さず打明きやれ、サ、ぎふじや、くさ瞬げば手を合せエ、忝いありがたい馴染よしきもない私。御誓言での情のお詞涙がこぼれて嬉しうござんす。ほんに色外にあらわるお前様の推量の通り紙治様と死る約束親方にせかれて逢瀬もたへ差合あ

つていま急に請出す事も叶す南の元の親方と爰にまだ五年ある年の内人手に取られては私は元より主は猶一分立すいつそ死でくれぬかエ、死まじよと引に引れぬ義理詰に、ふつと言替し首尾を見合せ相圖を定め抜て出よふ抜で出よといつ何時を最期共其日送りのあへない命私一人を頼みの母様死だ後では袖乞非人の飢死もなされふかこののみ悲しき私逆も命は一つ水くさい女さ思し召のも恥しながら其恥を捨てても死共ないが第一死すに事の濟様に。ごふぞお前を頼みます。と語れば駄き思案顔外には、つと聞いて。驚き思ひがけなき男氣。木から落たる如くにて氣もせき狂ひエ、扱は皆嘘か二年と云物化された根性くさりしアノごう狐踏

込で一討か。顔恥かいて腹いよか  
 と。齒ざりざり、口惜涙内にも小  
 春が託ち泣コレ申モ卑怯な頼み事な  
 から。お侍様のお情に今年中來春  
 二三月の頃迄も私に逢て下さんして  
 彼男のくる度毎に邪魔に成て期を延  
 し期を延せば、自手を切て先も殺さ  
 ず私も命を助る道理何の因果で死  
 契約した事ぞと思へば悔しうござん  
 すと。口と心は裏表絞る袂は雨露の  
 際にもたれて泣き居たる。ア、聞届  
 たそなたの願ひコレ風もくる人を見  
 ると格子の障子ばたくと立聞治兵  
 衛も氣も狂亂エ、流石賣物やす者め  
 胴性骨見違へし。エ、口惜や切らか  
 突ふかどう障子に移る二人の横顔。  
 エ、くらわせない。はりたい何ぬか  
 すやら駄き合。拜む囁くはへるさま

胸を押へさすつてもこらみられぬ勳  
 忍ならぬと心もせきに。せきの孫六  
 一尺七寸抜放し格子さきより小春  
 が脇腹爰ぞと見きわめぐつと突に。  
 座は遠く是はと斗怪我せな透さず  
 侍飛か、り兩手をつかんでぐつと  
 引入刀の下緒手ばしかく格子の柱に  
 がんじがらみにく、る内立歸る此の  
 家の夫婦ヤア是はとばかり驚げば。  
 苦しうない、障子ごしに拔身を突  
 込あばれ者腕を格子に括り置たれば  
 氣づかない事はない。そなた衆は小  
 春を連れて奥へ行きやれ身共はアノ狼  
 狽者何故斯様の狼狽をいたすぞ詮議  
 するサア、早く奥へ行きやれ、  
 イエ、お前斗爰に置ましては浮雲  
 ござりますイヤサコリヤ人立あれば  
 所の騒ぎ大勢が立合口論に及べば武

士の立ぬ様に成るまい物でもない。  
 と云も遊所故身も忍びの遊興、まい  
 く身共斗り爰に居て氣づかひなら  
 いつしよに奥へいかふ小春、おじ  
 や。いて寢よふアイあいとは云ぞ見  
 知ある脇指のつかれぬ胸にはつと貫  
 き治兵衛様何が何とイヤサア慈悲と  
 云事がなければ人は難儀をするげな  
 餘まり酒を過して色里にはあるなら  
 い、沙汰なしに。いなしてやらんし  
 たらナア。河庄さん。わしやよさそ  
 うに思ひます。いつそ此繩さいて。  
 アコリヤ、其繩とくなく、括り  
 付しは仔細あり身次第にして皆奥へ  
 夫れでもお前ハテ構はずと小春おじ  
 やいのもと、打連立て奥の間の影は見  
 ゆれど括られて格子手柵にもかけば  
 しまり身は煩悩に纏わる、犬に劣つ

た生恥を覺悟極めし血の涙絞り泣こ  
そ。ふびんなれ、ぞめき戻りの。身  
すがら太兵衛善六伴ひたち歸りヤイ  
コリヤヤイくこうし覗いてけつか  
るはどいつじやいくエーいやみた  
やつじやな、コリヤ頬かぶり取く  
エーほうかぶり取りやかれヤ治兵衛  
がわれに逢たふてく宵から一遍尋  
たはやい。サア甘兩の金戻せ。ム、  
甘兩の金さば。ヤアさばげなやい。  
確な證據さ懐の紙入より證文を取  
し。コリヤ是を見い。エー一つ金子  
甘兩也右は今日入用に付難儀いたし  
候所御取替下され候段御慈悲の程忘  
れ申さす。あり難く存奉り候何時  
成共此手形を以て、きつこ返濟申べ  
候後はお定りじや。江戸屋太兵衛  
殿紙屋治兵衛判けりやわれが直筆じ

やくぞよ。是でも覺へがないかサ  
ア夫は此間石町の御出家に。ヤアど  
こへぬけくくこの。そふわ拔させ  
ぬ。コリヤ證文が物云ふはやい。何  
じや逢たい。逢たいさは誰に逢ひた  
い、アコレく太兵衛さん、ぐづ  
くいふにや及ばぬわいのチ、そふ  
じやくエーうしやがれアイタく  
くハハハハ善六、ちよつこ見い  
く治兵衛がいたいさぬかすはづじ  
やコレ、これ見いしづり付けられて  
けつかるはいエーごにほんにけつ  
たいなナアコリやまごふしたんじや  
ろうなエー聞えた扱は盗びるいだな  
大騙め。がん盗め。息すりめこ。賊  
飛し蹴ちらし。ばり廻しコリヤ紙屋  
治兵衛が盗して縛られたま。呼ばり  
わめけは往來ふ人邊近所も驅集る

内より侍飛出善六を突飛し太兵衛  
が腕捻上ればアイタハハハハハハ  
や何とすりや。此治兵衛には仔細あ  
つて某が縛置く己らが土足にかけ盜  
賊さの狼藉已最前是へ參る砌無禮を  
働く泥坊めサア治兵衛が何盗んだ騙  
さは何を騙つた。サそれぬかせア  
コレくお侍證據のない事云はふ  
かい。コレ此證文が確な證據コレ見  
やれいの。何んさばかりやしたか夫  
れはご恩を見せた甘兩忝ないさ禮  
はぬかさす。イヤ坊主じやのイヤ御  
出家のこ。間に合をぬかす故騙さ云  
ふたが誤かヤちつこそふもあるま  
い。ドレ其一札と取にかゝるを孫右  
衛門透さす投出す甘兩太兵衛が孫に  
打付けのアイタハハハハハハハハハ  
た甘兩エーハイ是はく御きんさう

さまにそんならおいたたき申まじよ  
ふかい。エ、コリヤ後で小言を云ぬ  
やう一兩く改て受取おろう。ハイ  
ヘイくく申分はないか。イヤモ  
金請取ば云分は。ござりませぬ云か  
なくばコリヤこうと太兵衛がゑり髪  
引掴む是はと立寄る善六を洗んで投  
付又起上る太兵衛をば蹴飛ばしく投  
ちらせばほうく起て脱廻し、ヤイ  
おのいら、よふ見物して叩かされたな  
一々に面見覺へた。返報する覺へて  
おれとへらす口にて 逃出す立寄人  
々どつと笑ひ、ヤアどつかれてさへ  
アノおまがい橋から投て水くらはせ  
やるなくと追かけ行、人立透は侍  
立寄て括りめこき頭巾を取捨コリ  
ヤ此面を見よヤ兄者人と迷んとすれ  
ば孫右衛門引さいめヤ動きおるまい

うぬサア云事がある。うせうと引立  
内に引居れば兄者人くく面目な  
やま。ごふご座し。疊へひれふし泣  
居たる扱は兄御様かいのこ。走出る  
小春が胸ぐら取て引すゑヤ畜生め狐  
め太兵衛より先うぬをさ。足を上れ  
ば孫右衛門ヤイくく其たわけか  
ら事がおこるわい。コリヤ人をたら  
す遊女の習ひ儂か目には今見へたか  
此孫右衛門はナ。たつた今一現にて  
逢た女郎の心底を見ぬめて居るわい  
小春を蹴る程で狼狽た其儂が根性を  
なせ蹴ぬエ、是非もなや。弟とは云  
ながら三十におつかり勘太郎お末  
と云六つと四つの子の親六間口の家  
を持身体潰る、辨へなく兄の意見を  
請る事かい舅は伯母舞、姑は伯母者  
人親同然女房おさんは我爲には従弟

結び合く重くの縁者親子中一家  
一門参會にも儂も曾根崎通ひの悔よ  
り外餘の事は何にもないはいいこ  
しいは伯母者人連合五左衛門殿は。  
にべもない昔人か、の甥子に倒され  
娘を捨たおさんを取かへし天満中に  
恥か、せんこの。お腹立伯母者人の  
氣扱ひ敵になり味方になり病になる  
程心を苦しめコリヤ儂か恥を包まる  
も恩知すこのばちたつた一つでも行  
先に的が立斯ては家も立まじ小春が  
心底見さけ其上の一思案伯母の心  
も休めたく此亭主に工面し儂が病の  
根元見届くる女房子にも見かへしは  
尤く心中よしの女郎ア、お手柄  
く結構な弟を持人にも知れし粉  
屋の孫右衛門祭りの禰り衆か氣違か  
ついに差ぬ大小ぼつ込藏屋敷の役人

ま歌舞伎役者のまねをして馬鹿を盡した此刀おりやく捨所がないわいやい。小腹も立やら、おかしいやらあまりの事でエ、胸が痛いさ齒ざしみし泣顔隠す皴面に小春は始終むせ返り我身の上はふもいはす兄の意見と母親の心づかいを思ひやり、みなお道理と斗にて詞も涙にくれにけり治兵衛涙を押拭ひア、誤つた誤りました。兄者人三年先よりアノ古狸に見入られ親子一門妻子迄そでになし身体の手縫れも。小春さ云ふ家尻切にたぢされア、後悔千萬モ、ふつゝ心残られば足むきもするまじヤイ狸め狐め家尻切め貧乏神の親玉め思ひ切たま云證據は見よと肌にかけたる守二つ月領に一枚つゝ取かわしたる起證合せて廿九枚戻せば戀も

情もないコリヤ請取そばたど打つけ申兄者人あいつむ方のわれらも起證數改て請取てお前の方で火にくべて下さりませ。ヤア何さいふスリヤふつゝりと思切たかハイ微塵も心は残らぬなム。ハイ。チ、出かした男じや人中で面恥か、せた孫右衛門血を分た兄じやと思へばこそ、よふ思ひ切た嬉しいぞよ。イヤナニ小春殿こちらの治兵衛は男でござる、さつぱりと思ひ切ました今迄は小澤山によふ書てやつて下さつた、此起證返します治兵衛、方から何やら書てやつた物があるげな夫をこつちへ返して下されハテ今に成て何のうぢ、サ早ふ是か、くさ懐へ手を指込で守袋引出す一通ハテおしうもない此紙屑残らすお返しなされと云つゝ讀文

見て喫驚ナニ小春殿參る紙屋内ア、コレそりや見せられぬ大事の文さ。取付手をさり孫右衛門ム、スリヤコな様此狀の客へ義理立て。コレ申兄者人何所の客からき、狀じやちよつと見せてハテ扱ごこの客から狀が來ふと思ひ切た女郎の事、わがみの構ふ事はないサ、そつちへよつて居や、コレ小春殿最前は侍冥利は今粉屋の孫右衛門商ひ冥利女房子限つて咄しはせぬア、動の中にも夫程迄イヤサ眞實のなはいへ、女郎の常じや。最前の水くさい詞はこう云狀が來であるから是じや物。道理じや、夫に心中仕て死ふさとはまいかいあほうではあるはい、思ひ廻せば廻す程おかしいやら不便なやら餘りの事で涙がこぼれるハ、ハ、ハ、と笑ひ



に絞らす眞實は口に云れぬ心の禮孫  
右衛門様必ず其文外へ見せて下さり  
ますな起證と共に火に入るコレ誓言  
に違ひはないア、忝ない。それで私  
が立ちますと又伏沈めばアハ、ハ、ハ、

何の儕も立の立ぬさは人がまし、  
もふこう成からわ片時も面も見とも  
ないサア兄者人歸りましょ、いか  
様最前からの様子腹も立ふサアそん  
なら同道しませうサア先へ行きや。

ハイ。行きやれ、エ、行やいのこ  
云にしほく立出る。兄者人どうも  
爰がたまりませぬ今生のおもひ出に  
たつた一つあいつが面をさ走りよる  
をア、コリヤ、立さはいでごふす  
るのじゃハイごふも仕や致しません  
そんならごふもせんなら、からい

うたらよいわいハイ何んの口でいう  
斗りでございますそんならゑいハイ  
エ、ナエ、何んにも言ばいでもよい  
事ヤイ赤狸め倍故に面恥かき。足か  
け三年と云物戀し。ゆかし。いさし  
可愛も。けふも云けふ愛想が盡たは  
い、たつた此足一本の暇乞と額際は  
つたも蹴てわつと涙出す男氣を思ひ  
やる程堪兼て。もふこりやごふも。  
いつそ心を打明てコレく蹴れふが  
た、かれふが、そこをじつとしんぼ  
うせすば此狀の客へ義理が立つまい  
くの小春殿と孫右衛門に制せら  
れハア、はつと斗に泣別れ歸る姿も  
いたくしく、後を見送り聲を上な  
げく小春もむごらしきぶ心中か心中  
か誠の心は女房の其一筆のおく深く

たが文も見ぬ戀の道別れてこそは立  
歸る。

たが文も見ぬ戀の道別れてこそは立  
歸る。



保名物狂の段

豊竹駒太夫

竹本南部太夫  
竹本さの太夫  
竹本津の手太夫

鶴澤友次郎

鶴澤重造

鶴澤友重

鶴澤友重

鶴澤友重

人形

阿倍保名

葛の葉姫

奴與勤平

石川悪右衛門

捕狐葛の巻

この淨瑠璃は享保十九年十月十五日初日の(百九十八年前)竹本座に初演された竹田出雲の大作であります。作は山本土佐椽の正本「信田妻」豊竹若太夫の正本「信田森女占」等を原として脚色されたものであります。内容は天文博士賀茂保憲の高弟に阿倍保名と蘆屋道満の二人があり賀茂薨じてその秘書玉兔集を何れに傳へるかで争が起る、保名の戀人賀茂の息女禰の前はその爲に自害して秘書は道満の手に歸する、戀

次 蘆屋道満大内鑑

保名小袖物狂の段  
葛の葉子別れの段  
二人奴の段

人に死別した保名は正氣を失ひかたみの小袖を抱きしめて、心うつろに狂ひ歩く(保名狂亂)禰の前の妹は葛の葉とて姉に相似の形容保名はこれを深く戀慕し初めた、が葛の葉には兼て石川悪右衛門が執心に附まつてゐる、芦屋道満は悪右衛門と謀つて、専横の權を振はふとする、その奸計のために白狐の生血があるので悪右衛門は信太の森に白狐狩をする、悪右衛門に追はれた一匹の白狐は保名と葛の葉に助けられる、悪右衛門の無慮の執着から逃れて葛の葉は奴與勤平に送られて庄司屋敷へ引返す、保名は悪右衛門のために理不盡なめに遭ふ、白狐は先に助けられた恩報に保名をかばひ、保名が戀慕ふ葛の葉に身を扮し保名

を伴つて阿部の里へさ向ひ二世の契を交はし童子を生ける、數年後のある日葛の葉姫親子は阿部の保名の寓居を訪れる、白狐の化身葛の葉は眞物の葛の葉姫の唐突の訪れに、親子夫婦の恩愛の絆に引かれながら一首を遺して姿を消す、その一首は今も傳へのこる「戀しくば尋ね來て見よ、和泉なる信太の森のうらみ葛の葉である、葛の葉姫は改めて保名と夫婦となつて、童子を育てる童子は後に陰陽博士阿部晴明となる。現在の人形三人遣はこの淨瑠璃の初演が始まりで奴與勘平、野干平の人形の左を別の人に遣はせ與勘平の腹をふくる、やうにしたものでこれより三人掛りになつたものです。

(床本) 保名物狂の段

千早振袖打かけも鄙に目馴れぬ取形の葛の葉姫さ聞へしは信太の庄司が秘藏娘心に深き立願の歩路いさばぬ神詣、鄙にはまれな品形花も色にや恥ぬらん外珍らしい女共申々姫君様けふは俄のお供にて我々までもよい氣げらしそふしてけふの神詣は何のお爲さほのめけばチ、語らればしらぬは尤いつぞやより毎夜血筋にはなる、さいふ心わいりな夢見る故、都にまします姉上神の前様の身の上にも悲しい事も有ふかそれ故の神参りじやわいな、皆達も俱々に随分と願ふてたも頼む頼むとはからを思ふ心ぞやさしけれ、チ、お前様の御姉妹と言神も納受遊ばさい

では、したか申し姫君様それば、てつきり、逆夢でござります、庄司様甥の殿石川悪右衛門様お前様お嫌いなさる、程しこりかいつて、女房呼ばはり、其悪右衛門様に放る、と言ふ夢の告、お悦びなされませ、チいよふ祝ひ直してたもつたアノ人に思ひ切らる、と言は此上もなき悦び嬉しいわいのふ、さ、様もか、様も追付け愛へお出のはづ、それならば待合せ御一緒に御参詣此間にちり残りの花を御覽もお慰みさ、てん手に敷や毛氈の朱は都の唐錦打こんじたる女中の遊び皆々幕にぞ入にけり。

M 戀よ戀我中空になすな戀、思ふ中をば吹分る、あら心なの嵐に連れてうら吹かへすかたみの小袖、見るに

思ひのます故にこそくるはすれ、狂  
ふはたそや我はそも安倍の保名む、  
安からぬ胸にせまりし数々より何國  
をさして、和泉路を寄るべの水もう  
たかたの、たゞよふ姿亂れ髪、素袍  
袴ふみしだき浮れ歩ぞ只なられ、是  
々物ぞおふもし此邊へ十八九の娘の  
かいざりづまでしやなりくぞ行ぬ  
か、ヤアヤアく何じやしらん、チ  
其尋る人こそ、芝蘭芙蓉の花の  
顔、姿は物が、及びなき、「更  
ゆく鐘別の鳥も一人ぬる夜は」よさ  
の泊りはここが泊りぞ、草を敷寝  
の肘枕くひざり明すぞ悲しけれ  
く葉越のく幕の内昔し戀しきお  
もかげや、うつりがや、其おもかげ  
に露程も似た人有ばおしへてたべ、  
遠近人に物さばん、チ、イくぞ招

けば招く與勘平、心細道分迷ひ行は  
あびきの聲さへも梢まばらにうらむ  
れて、かげも姿もちらく急ぐ心  
に道はかも行手の森を目當にて漸  
に走り付、是はく正体もなき旦那  
の有様人の見る目も恥賜へ、サアお  
歸りさいさめすかして引手を拂ひか  
しこにしげる櫛の枝に、かたみの小  
袖、打かけて、アレくアレく  
く枝にゆかしき人が見へたり、嬉  
しやとて、よぢ登れば櫛の枝は身を  
さふし愛着は胸をこがす、コハそも  
いかに淺ましやと、詮方涙に伏しづ  
む、コハ情なき御有様心なき草木を  
こがれ賜ふも迷ひのそら目、何、そ  
ら目とは事おかしや、心有ばこそ時  
をたかへすア、アレくくくア  
ソレくくそれそこに、ドレビ

こに、眞實君に逢たくば信太なる社  
に歩みを運びて七日七夜さ、こもら  
ば御利生、まさしくあらたに、戀し  
き人にはあひも見せめ、中にこそ  
さら櫛の枝に君が小袖を打きせて、  
まがふ方なき櫛の前非常さは與勘平  
ナイくく汝こそ草よ木よと、か  
たみの小袖身に添へて泣つ笑ふつ、  
様々に狂ひ亂るゝばかりなり始終暮  
のもの見より覗き見されて葛の葉は  
賤からざる都人何故かゝる亂心さ、  
暮しぼらせて、立出れば姫を見るよ  
り狂人はノウなつかしの櫛の前さ抱  
付んぞ立寄をつきんくの女押隔てコ  
レく廬相せまい、あなたに覺へな  
い事を、めつそふな狂人殿それ留さ  
つしやれ奴殿、イヤ留おりまする、  
お氣遣ひなされますな、モ語るも主

人の恥なれども一通り聞て下さりませ、エ、手前の旦那も、思ひ人におくれ賜ひそれより正氣を取亂し御覽の如く物狂ひ其戀人にあなな様モヤモさんご生寫し、直な目にさへ見違ゆるに亂心では尤々、御了簡重々あまへたお願ひなれごがる、人に似た姫君、やさしきお詞かけ賜そ、み安きは人心しぜん狂氣も沈まれば此上もなきじひ心、お傍の女中もおさりなしとよきなく頼めば葛の葉はまだうら若き心よりいらへなければ腰元共申々姫君様のお詞でアノ氣違ひが直るならばそれはくきつい善根、見れば見る程よい男、戀故と聞や女氣もかたむき安きいな舟のいなにはあらず葛の葉も、それがマアあられもない、ごふ言てよからふやら

と恥かしながら立寄て、戀しと思召方がお果なされて狂氣さはおいさしぼやお笑止や、世には又忘れ草も有ならひ、お心を取直し最早お歸り遊ばせと言は保名も心を沈めよくく見れば紳ならず似たりと思ふ執着に連て心も正氣と成面目なげに差うつむき暫しこたへもなかりしが、ヤイ與勘平おれば正氣に成たるぞ、ヤアナニ正氣、アノ正氣、テ扱、嬉しや忝や是もひさへにあなたのおかけお禮、くご主従手を下悦ぶにぞ、葛の葉も面はゆげに田舎育の自らが一寸お詞かけたさて、お心の納るとはホ、い、い、チ、恥しと、顔を赤め、早速ながらちさお尋ね申たいは其お小袖、自らがたしかに覺への有る模様今又おつしやる櫛さば、もし加茂

の保のり様のチ、其娘の櫛の前、ヤア、そんなりや、私が姉様と、聞に保名も聞及ぶ、信太の御息女葛の葉殿が、是はく驚きしが拙者櫛の前と、深ふ契りし安倍の保名と聞に今更餘所ならぬ姉の噂に驚かれ此頃悪き夢の告、櫛様のお身の上お果なされし入譯も聞せてたべと取付ば、チ、聞たきは尤ながら爰は往くは人目も有、幸の幕の内委細あれにて咄し致さん、此上は妹御を櫛さ思ひ神かけてと目元でしらせば詞さへ岩木なられば葛の葉もほころび安き幕のかけ、伴ひてこそ入にける、女ども口々に猫に鯉の毒ばいり、たとひ姉嫁なればこそ、手放してやられもする、さつきの様に狂氣ならばかんまへて油斷がならぬ、是に付て

もさかく手柄は奴殿、當座の氣轉で戀の亂心しづめるさは家原の文珠も及ばぬ智恵、殊に名まで才覺らしい可愛らしい男やと春中をさんど御勤平、旦那の狂氣以來は可愛らしいにこり果たなふ、いや／＼勿体なやと幕の内へと馳入れば後は笑ひに腰元共皆々幕へ入折柄、貝鐘太鼓、亂調に嵐に連れて聞ゆる物音何事やらんぞ安倍の保名姫諸井に立出れば間近き森のこなたより年ふる白狐かけ來り、葛の葉保名が眞只中へ助けてくれと言ねばかりに隠れ居る、ムウよめた、今聞へし貝鐘は狐狩、飛鳥懐に入る時は狩人も是を取ず、殊に、白狐は妖物にて、唐土にては阿紫と名付け我朝にては董女御前、倉稻の御魂の神使にて恩を知り怨を報ふ畜類、助

てやらんぞ饒りなる社の扉押開き抱き入れば嬉げに四足をひそめかきみ居る時に向ふの堤傳ひ眞黒に成て石川悪右衛門、手の者引連れかけ來り件の白狐を見失ひきよろ／＼眼に姫を見付コレハ葛の葉姫かそれにおは安倍の保名かエ、生白けたしやつつらだな、コリヤ某は左大將の仰を受け近國を狐狩、見付た白狐取逃し、縁起悪ふ思ふたに願ふさころの女房狩、今日一日は休みにして連れて歸つて腰膝さすらせ、此間の草臥休め、葛の葉おじやこ立かゝるをのふうるさや、赦してと逃退く姫を引とらへ無理に引立行んぞす、是は無体さこむる保名エ、邪魔ひろぐなと無法の石川、たまり兼て與勘平悪右衛門を引退て、葛の葉保名を後にか

こひ大手をひろげ突立ばヤア面倒な蚊蟻蜂奴めソレきやつめからぶちのめせ、さ下知に隨ひ家來共一度にごつご寄奴原、取ては投退ほうり退、向ふ奴原おさがい蹴上、左右へかゝるを飛違へばらり／＼と投ちらせばばらん／＼つと逃散たり、すき見て切込強氣の石川かいくつて、抜合せ受つ流しつ手練奴、切立／＼切まくられ叶はぬ赦せと悪右衛門後をも見ずして、逃て行、何國までもと追行を保名こゝめて手柄／＼長追無用併し無道人の悪右衛門、左大將を甲に着て多勢引連取て返さば面倒なり此間に姫を屋敷まで實に尤と與勘平奴も御供申さんぞ姫を伴ひ行道へ又引返す石川が大勢引連立ばだかり最前ばよふ手ひごいめに合したな、

葛の葉子別れの段

中 (竹本 鏡太夫)

鶴澤友平

鶴澤綱右衛門

切 豊竹古軼太夫

鶴澤清六

人形

狐 葛の葉 吉田榮三

阿倍童子 桐竹紋司

木綿買段八 吉田瓢壽呂

信田庄司 吉田玉市

庄司奥方 桐竹紋太郎

葛の葉姫 吉田扇太郎

阿倍保名 吉田文五郎

落合藤治 吉田榮三郎

信樂雲藏 吉田文二郎

おのれ一人を手取にせんご、むらが  
りかゝるを事ごもせず受つ流しつ戦  
ひける、敵は大勢こなたは一人、無  
念ご立寄保名をば突退はれ退蹴飛し  
後を見ずして、立歸る、後に保名は

齒がみをなしエ、口惜や残念や、モ  
ウ此上は名字のけがれご既に自害ご  
見へたる所へこなたの方より葛の葉  
姫、それご見るより走り寄りコレ待  
た早まるまいご聲かけられて、ヤア

そなたは葛の葉ごふして爰へ來たる  
ぞ、サイナア最前道までいたれ共、  
お前の上氣遣はしご、取て返して  
來たものを見捨ておいて死なふごは

聞へませぬごばかりにて、かこち涙  
ぞ道理なり、保名心を取直しチ、そ  
ふじや思ひ付たり、住吉にこなたた  
る津の國阿倍野は我本國、暫くかし

こに引籠り時節を待んと勇め共立足  
さへもよろしくご風にもまるい  
榊の枝を杖よ柱ご葛の葉が保名の手  
を引いたばりて阿倍野をさして急ぎ  
ける。

(床本) 葛の葉子別れの段(中)

こなり榊の木を十六七かごおもふて  
のぞきやしほらしや色づいた、十六  
七かご思ふてのぞきや、しほらしや  
色づいたかけておる所も安倍の菅垣  
や間近き住吉天王寺靈佛靈社に歩み  
をはこび父は我子の出世を祈、母は  
心を染機にしんきしんくを堅横にお  
さな車の手づさびも子に世話織ごぞ  
見へにける、母は機家を立出てコレ  
く童子昨日も父様の言しやんすに  
は、こいつには悪い癖が有、只由け

らを殺したがる、今から殺生を好で  
ろくな者にはなるまい、必ず蜻蛉釣  
るなよ、ねぎやいなごを殺すなご、  
おしかりなされたを忘れてか、モた  
つた一人の輿勘平は京へ行、留主の  
間に池へでもはまるか、疵でも付た  
ら母は言譯何さしよふそふしてさつ  
きにから間もある、乳のんで癢れし  
や、アイそんならか、様ばんには松  
の虫塚へ虫をたんと取りに行ぞへ、  
チ、それもさ、様が連てござらふコ  
レ小言言はずさねんれこせい、  
いさし者を誰がいのふ、手間隙入す  
すや、ご母にそへ乳の稚子はいか  
なるよい夢見るやらん、ハイか、様  
内にござりますか、此間の日和つ  
きて、めつかりさ木綿の値がよいか  
織ためがあれば、一疋でも半疋でも

賣れせんかいなサア次第、く、寒ふ  
はなる夫のはだ着ようら替る子にも  
さつばり着せただれご様も續ぐも織  
も染るも手一つで内の肌さへふせぎ  
兼る、賣木綿とてはモ、いかな、  
切一尺もござんせぬ、そして、けふ  
はついに見なれぬ木綿買達ないと言  
のに立替り入替りこなさんで丁度三  
人それにまだ内の者や人の顔をじろ  
く眺めてマ合點の行ぬ木綿買達サ  
ない所に長居せずさ、さつさご、い  
んで下さんせご、愛相なければ立上  
り、イヤモ合點が行いでからが、高  
が天下の町の借家に住木綿買、氣遣  
ひな事は少共ござらん、したご仕事  
は心につれるもの、着尺を長ふ氣を  
廣ふ詞につやも有様にコレ其内織て  
下さりませ又御無心に参らふさご

來し道へ出て行、ア、よしな事  
隙取し日足も丁度八つ下り七つの器  
へさやく手の片付てもうけせん、れ  
んねこれ、こさた、きつけ、又も機  
家にさしか、り隣柿の木は十六七か  
ご思ふて覗きやしほらしや色付た下  
衆にはあらぬ襦はづれ老人夫婦、旅  
姿、娘めく人介抱し人の教へにそん  
じやうそこ軒を目當に門の口、コ  
リヤ、愛よご父の老人二人を近付  
保名の有所聞さひさしく、是まで尋  
ね來れ共、能く、思へば別てより  
早六年長の年月生死のさひおさづれ  
もなく、此方こそ替られご保名の心  
底はかりがたし、まづ某一人對面  
し、所存を聞いて、其上で母も娘も呼  
出さん、暫く爰に影隠せ、いで案内  
せん頼みましよ、もの申さんさ、内



に入見れ共く人ばなく、ムン扱は保名は他出召れたか、あの機音は、召遣ひか、ヤ御免なれそれへまゐる窓に立寄顔見合せ扱も似たりと悔りし、興さめ門へ立出れば女は何の心なく織手拍子の音すめり、ヤレくばッよ、娘よ奇妙く娘の葛の葉がアレあそこに機織でいるわい、チ、つがもない、爰に在る葛の葉が何のあそこに居るもので、此廣い世界に同じ人間、似た人のあらいでてモママアぎやうさんな、ホー、事ばかり、いやのふ、そふたい、物の似たさいふは鷹さからず、雪と雪、イヤモウく其段ではない、正銘正眞の娘の葛の葉疑はしくば覗てお見やれ、チ、それはけふがる似た人や、娘もおじやと引連て忍ぶ間近き窓障

子、破れに三人が息をつめ覗けば見かはす顔ばかり、ごなたじや誰じやと言ふ聲まで似はせてやつげりほんくの葛の葉も肝つみれ母の手を引逃出ればノウく親父殿のいがいはれぬこちらが本の葛の葉かあちらが眞事の葛の葉か、親の目にさへ、今ご成子にごまくれて、気が迷ふごなけすすれば葛の葉も母様お道理でござります、私か心にさへおれがあの人が、あの人がおれか、思はれて俄に胸がやるせない、さ、様ごちらをどふと言ふ分別なされて下されと袖に絶れば引寄せて三人顔を見合せて溜息

(床本) 葛の葉子別れの段(切)

立歸る安倍の保名それさ見るよりヤア庄司殿御夫婦か、お身は保名かなふなつかしやくそれは此方も御同然まづ奥へいざ御案内立袂をひかへ先々急に渡す物有り、コレ預りの葛の葉連て参つた渡し申す賀殿と引合されて葛の葉は遠二人の親の前いはで心を知かしの顔に會釋ぞこぼれける保名大にいたみ入り、是はく拙者が留守の内早葛の葉に御對面なされ衣服を着せかへ今連て來たやうに見せ、此保名をこまらせお笑ひなされふ爲か、女房も女房、今始めて來たやうに所体を作て何じやの、ハ、イヤ此申譯こそ段々御息女葛の葉ご夫婦になり是にある事先年信太の宮にて悪右衛門狼藉の時、既にこそ難儀におよび生害仕らふぞ存する所へ、早速此人が馳付け様々の介

抱それより一つ所に立退所々漂泊し  
此所の住居早五年安倍の童子を申す  
五歳の男子を設け、おさなしく育  
申に付是を力にお詫申さば孫に免じ  
我不行跡、御免もあらふか、けふは  
参らふ翌はお詫に参らんさ口では申  
せ共何か所存に任せず一日く相  
延び今更お詫申さふ詞もない、重々  
の不調法、孫に免じ御堪忍あるやう  
に母様お取なし下されさ身を投伏て  
詫にける、イヤサ言譯所でない、き  
て見れば不思議たらしく先あのはた  
織る人を密かに覗いて見とおじやれ、  
實もく女房は爰に居る、マ誰が機  
を織らんさつぶやきながら立寄てそ  
つと覗いて恠りし色を違へ立歸りあ  
そこにも葛の葉爰にも葛の葉コリヤ  
とふじやこはくいかにさ、轉倒し

奥を見てはあきれ顔、こなたを見て  
は興覚め顔、ものを言す立つ居つ  
思ひがけなき驚きに只呆然たるばか  
りなりチ、當惑の体至極せり、我も  
信太にて別れし後悪右衛門が、さん  
げんにて、重代の所領没收せられ、  
よしみの山の片里に世を忍び住其中  
に貴殿の事を戀したひこがれ煩ふ此  
娘、五年の年月色々看病肝をこがす  
所不慮に此頃貴殿の有家聞さひさし  
く忽ち病氣平癒し夫婦が召連れきて  
見れば思ひも寄らぬ二人の葛の葉、  
けふも翌も覺果しが、しりぞいて分  
別するにりこん病さ言ふ病あり、俗  
にはかけの煩ひさ言答を二つに分る  
さ言へ共それも一つ軒をば放れず、  
時々答を合すさいへば、それでもな  
し、まさしく是は變化の所以か又は

天狗の業なるべし、我娘に引合誠  
をもつて理をおせば、忽ち姿を現は  
すべし、性根をばうする所てなし保  
名心を付られよ、氣を付賜へ舞殿さ  
夫婦力を付賜へば仰までも候はず我  
も加茂の保憲にしたがひ是しきの邪  
正を糾す事一旬一指のしゆだんにあ  
り、屹度しるしを見せ申さん、おの  
くは暫しの中見苦しく共此物置に  
密にお忍び下さるべしと、よぎなき  
詞に人々もかまへて仕損じ賜ふなさ  
あやぶ心の物置の簾を上げて忍ばる  
も、保名こさなき風情にて、内に入  
り、是は坊主めかあがきくたび  
れ此ふんぞつて寝たなりはいの童子  
が母はおはせぬか今歸りしと呼ばれ  
ば前垂襦取あへすい一つよりけふのお  
歸りは遅かりしお肌寒になかりしか

いや／＼空もあたゝかに、住吉へ参詣し、歸りは例の天王寺ノウ思ひも寄らず六時堂の前、お身の父庄司どの御夫婦にはたご行合ひ、日頃の不屈胸に詰つて、挨拶を仕兼たればあちには一かう、恨みのけもなく在家を聞た故、娘に逢ふ爲、尋れ來れ共見る通り連衆も有り、此衆を片付日暮にはそれへ参ぶ、たべ物の用意は無用、洗足の湯を頼さなか／＼心解たる挨拶一つ二つもの言と思ひしか

かいつまんでも五年の咄し思はず時をうついたお身も久／＼の對面さぞ悦び身も大慶さ物語ればそれは何よりお嬉しや日くれとても間もなし用意無用と宣ふ共なんぞせずばなるまいか、イヤ／＼孫を突出しお目にかけるが馳走の一番、お身も髪に櫛で

もいれ衣服も着替へしほたらさした体見せませぬ、それが馳走の第二番サア早ふ／＼身は夜ささもの物語り此草臥ではつゞくまい日暮まで一睡せんと言つ、女房のなりふぜい見れども驚く体もなく髪取上る其姿ごつこに一つの言分なし但しは娘を連れてきた庄司夫婦が何ぞ心はあるまいか迷ふ心の奥の間へしのびて事を窺ひける、妻は衣服を改めて、しほ／＼と奥より出で伏たる童子を抱きあげ乳房をふくめ抱きしめて言はんさすれごせぐりくる涙は聲に先立て暫くむせび入けるが恥かしや淺間しや年月包みしかひもなくおのれさ本性を現はして、夫子の縁を是切に別れればならぬ品になる、父御にかく言たいが互に顔を合せては身の上

語るも面白せ、御身寝耳によく覺へ父御にかくと傳てたべ、我は誠は人間ならず、六年以前信太にて悪右衛門に狩出され死る命を保名殿に助けられ再び花咲亂菊の千年近き狐ぞやあまつさへ我故に數ヶ所の疵をうけ賜へ生害せんとし賜ひし命の恩を報ぜんさ葛の葉姫の姿さ變じ疵を介抱自害をさめいたはり、付添ふ其うちに結ぶ妹春の愛着しん、夫婦のたらしなせしより夫の大事さ、大切さ愚痴なる畜生さんがいは人間よりは百倍ぞや、殊におこを設けしより右さ方に夫さ子を抱て寝る夜の睦事も夕べの床を限りぞこしらす野干の通力もいさし可愛にうせけるが、今別るゝとて父御の業でもなく元より名をかり姿をかりし葛の葉殿恩

は有こも恨みはなし庄司ごの御夫婦  
を誠のぢいさま、ばいさま葛の葉殿  
を眞實の母と思ふてしたしまば、さ  
のみ憎ふも思すまじ、悪あがきをふ  
つゝりこやめ手習、學問精出して遠  
は父の子程ある器用者、譽られよ何  
をさせても埒明かぬ道理よ、狐の子  
じやものご人に笑はれせしられて母  
が名までも呼出すな常々父御ぜの、  
虫けらの命を取るろくな者にはなる  
まいご只かりそめのおしかりも母が  
狐の本性を請繼だるか淺間しやも胸  
に釘はり、さす如く何ぼう悲し、か  
りつるに成人の後までも小鳥一つ虫  
一つ無益の殺生ばしすなへ必ずく  
別る、共母はそなたのかげ身に添ひ  
行末長く守るべし、こは言ものいふ  
り捨て是む何ご歸られふ、名残惜や

いごおしやエ、離れがたなや、こち  
よれご、抱上抱付抱しめて思はずわ  
つご泣聲に保名一間を走り出、仔細  
聞たり何ゆへに童子を捨てやるべき  
ご呼はる聲に庄司夫婦葛の葉も、轉  
び出、放ちはやらじご取付け抱し童  
子をたさすて、形はきへて失にけ  
る、庄司目をしげた、きエ、扱夢は  
かりかくごしつたらば源々尋れ來す  
共しやうもやうもあるべきに無慙の  
次第見る事かやご、夫婦が悔めば葛  
の葉も手持ぶさたに見へけるが、ア  
いそふじや何はごもあれかくも有り  
、自が姿となり、自が名を名のり、  
産んで貰ひし此坊は取もなほさぬ我  
子なり、ごも様か、様お前方の爲に  
も眞實の孫じやご思ふて、下さんせ  
コレばんち今から此母が身にかへて

いごしがる、今迄のか、様のやうに  
か、様くごしなつこらしう頼そや  
チ、よい子やご抱賜へば乳をさむし  
ていやくく此か、様はそでない  
ご膝を這おり見廻してか、様くご  
呼叫べば保名たへ兼大聲上げたごへ  
野干の身成さも物の哀をしればこそ  
五年六年付まごひ命の恩をほうぜす  
や、いはんや子まで設けし中、狐を  
妻にもつたりご笑ふ人は笑ひもせよ  
我はちつごもはづかしからず別る、  
共相對にて互に合點の其上は失もせ  
よ、消もせよ此儘にてはいつまでも  
放ちはやらじやア葛の葉、童子ご母  
よ女房よご相の袂を引明くれば向ふ  
の障子に一首の歌、戀しくば尋ね  
來て見よ和泉なる信太の森のうらみ  
葛の葉、ハア扱は一首の篋を残しつ

れなふも歸りしな、我に名残は残り  
 ず共童子は不便に思はずかと奥に  
 け入表に出狂氣の如く馳け廻れば童  
 子も父の後につきかゝ様何處へ行か  
 しやつた、かゝ様のふさ、かつげさ  
 伏し聲をばかりに足すりし、身をも  
 だへ、歎くにぞ庄司夫婦葛の葉も俱  
 に哀れにぞり亂し前後不覺に歎かる  
 い、庄司歎きをさめめんと思ひ、ヤ  
 ア保名不覺なり、狐はかりが葛の葉  
 で我娘は葛の葉ならずや、殊にのこ  
 せし一首の歌戀しくば尋れ来て見よ  
 と讀だればいつても信太へ行ば出逢  
 ふに疑ひなし、エ、未練さんく、早  
 法至極といさむる所へけさより立も  
 ふ木綿貫一つになつてついさ入る、  
 ヤア安倍の保名葛の葉信太の庄司見  
 付たくかくいふは石川悪右衛門殿

家來荏柄の段八しからき雲霧落合藤  
 治主人の御心をかけらるゝ葛の葉を  
 隠し置保名は密夫向前討殺して姫を  
 連れ來れど此頃爰に徘徊しけふてつ  
 はせたは百年目、女房が有ても首が  
 なふては濟まい畏まつた葛の葉を  
 渡せと呼はつたり、老人夫婦足  
 よばの殊に歎きに氣もおくれ、途方  
 にくれて立騒ぐ、保名はつこ心付き  
 申し、騒ぐまい、葛の葉は童子を抱  
 き御夫婦を介抱し裏口を出て影隠し  
 た遠へ逃るに及ばずと襦ひつからげ  
 つ、立上り、ヤア悪者に向つて返答  
 なし、葛の葉がほしくば此保名を首  
 にして連て行、サア來いさかたみこ  
 そ今は仇なれ、幸さおりかけし、布  
 櫛の招木掛板巻竹よ、契り挽箆よわ  
 くなんど、はづみを打てなげかけ

くためらふ所をまつかせと親機エ  
 いさこち放し咎ある者を成敗の礫  
 さいうばた物のあんばい見よこふり  
 廻しつ立くく日來には似ぬ強勢  
 も狐や力添ぬらん、はげしかりける  
 働なり、落合は逆したく段八雲藏生  
 兵法あばら眉間大疵うけのたり  
 廻つて死てけり、人々馳出手柄く  
 さいさめ共葛の葉は勇みなく何を言  
 ても私に乳もなふてはいつまでも此  
 子がなまふやうがない、あつちに  
 有ても入らぬ乳、貰ふてほしいと泣  
 ければ、ア、道理くそれまでもな  
 く一度は尋逢て叶はぬ義理、夜道を  
 行もたごくし、明なば夫婦童子を  
 つれ尋れてきませいづみなる信太の  
 森へ急ぎ行く。

信田森二人奴の段

(床本) 二人奴の段

野 千 平 平  
 與 勘 平 平  
 惡 右 門 平  
 藤 衛 治 門 平  
 葛 の 葉 治 門 平  
 童 子 姫 太 夫

竹本文字太夫  
 竹本相生太夫  
 竹本長尾太夫  
 竹本鏡太夫  
 竹本文太夫  
 竹本播路太夫  
 竹本喜久太夫  
 豊澤廣助  
 野澤勝平  
 鶴澤友之助  
 鶴澤友之助  
 豊澤猿二助  
 野澤八助  
 野澤喜代之助  
 鶴澤團伊三  
 鶴澤福太郎  
 鶴澤友助  
 鶴澤勝助  
 鶴澤小猿  
 鶴澤網延

時もこそあれ悪右衛門、葛の葉を  
 ばい取んと手の者引具し追馳け來り  
 コリヤ〜藤治、足よわを同道すれ  
 ば遠くは行じと思ひのほか、保名め  
 は逃る共鼻がおてきを手に入よこさ  
 よる付眼に乗物見付、ヤア物ぐさし  
 と立かゝり戸をおし明れば葛の葉親  
 子はつと驚き逃出る、ごつこいさせ  
 ぬと捻込おし入おかみ様に子添迄保  
 名めを生捕よい人實急げ〜と乗物  
 かゝせ引返す向ふよりコリヤ待〜  
 く〜やらぬ〜奴がやらない乗物待  
 うと棒鼻掴みこりや〜よい〜よ  
 い所へちよぶご参つて與勘平、ひげ  
 が手並を忘れたか、性懲もなき悪右  
 衛門乗物置てつゝ走れ、命助けてこ

ますのがそつちの爲にも與勘平、但  
 そと返る氣でこはりますかこ睨付る  
 ヤア推参なり唐辛子め、うぬが命は  
 天井守り奴ごうみに切くだけご主従  
 抜連打てかゝるを、かいくかり〜  
 切より早い手摺料理、取ては投〜  
 さつてもあんばい與勘平、逃るをや  
 らじご追て行、道引違へ又爰へ京よ  
 り歸る與勘平、刀のさやに状箱結付  
 け、ひよろ〜來るを葛の葉悦び、  
 ナ〜手柄仕やつた出かしたつた、大  
 勢ご只一人をなにご我はなかつた  
 かや、ヤア是は何おつしやる奴めは  
 且那の御用、一昨日の夜京へ登り、  
 お返事は此状箱、安倍の野迄戻て見  
 れば思ひがけない庄司様御夫婦お前  
 のお噂さかの〜様子、吃驚直様参つ  
 たは、たつた今、手柄のての字びや

人形

狐 葛 の 葉 吉 田 榮 三

阿 倍 童 子 桐 竹 紋 司

奴 與 勘 平 吉 田 玉 松

奴 野 千 平 桐 竹 政 龜

石 川 悪 右 衛 門 吉 田 玉 幸

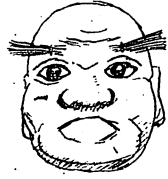
捕 卷 大 ぜ い

くらい覺こはりませぬ、又あの人のひげをいやる、悪右衛門が大勢追はらやつた氣味のよき、此葛の葉がよふ見てゐる、何ぼ見てござつても覺へない與勘平、實にもはれにも鬢一人、葛の葉様なら二人も有筈、但しはお前がかのではないか、めつたに傍へよらしやますなごまつげぬらせばエ、何いやるそなたこそぞぎくごまきらしい與勘平、イヤお前が、イヤ我身がご、争ふ後へむらくご取て返す悪右衛門、アレ逃すなご、下地をなす、ヤアよふこそく石川殿手柄の覺へなかつたにさしに來たコナ心中者め、ごてもさして下んすなら前髪がよかるものすりこくつた氣男首蕙いは、まゝよ高野六十那知八十ごつてくれんご拔放し切てか、

ればさしもの大勢立足もなく逃て行葛の葉は童子を抱き是のふあぶない長追無用、戻りやくご身をあせる左手の畦より落合藤治、サアしてやつたごひんだかへ宙に引揚げ馳り行く、尾花萱原蘭菊のしげみに有つて與勘平、コリヤさせぬはご投退ればひるまず拔て打かゝるを、まかせて置うご早足の早業切立く追まくる、親子は前後敵の中、遁れむたなく乗物の戸を引立て入所へ二人の奴は敵をばらひ東西より立歸り、爰は危しくご乗物片手にさし上しは肩も揃ひし六尺ゆたか、手柄もついでの大肌脱一息つきしは呵云の二王、げんぶくしたる如くなり、童子は物見に顔さし出しかゝさんあれを見さつしやれ、おれがべいが二人になつた、奴







吃又平名筆の段

島大夫 吹め

豊竹 呂 太夫

鶴澤 清叶 二太郎

レツ (鶴澤 清叶 二太郎)

人形

修理之助	佐將監	吃又平	女房おとく	雅樂之助	百姓
吉田文作	桐竹門	吉田玉七	桐竹紋十	吉田玉幸	大田玉

切傾城反魂香

吃又平名筆の段

この淨瑠璃は寶永五年の竹本座上演  
近松門左衛門作に胚胎し、時代物と  
世話物の中間を行きたる作柄で近松  
翁影作中の雄篇であります、巨匠土  
佐將監の弟子修理之介は鉦陸に現は  
れた虎を繪筆で掻消し光澄の苗字を  
許される、兄弟子の浮世又平は師の  
不興を蒙り其上愚鈍と貧に悶々の程  
にあるが今この光澄の出世を見るに  
つけ一層世を儚み今生の思出にこそ手

水鉢に自齋像を畫き一念の通じて師  
より光起の苗字を許され喜びに大頭  
舞を女房づれに舞讓ひ、師より大役  
を仰付かつて真んで往くさいふ好箇  
の名作であります。

(床本) 吃又平名筆の段

爰に土佐の末弟浮世又平重起さいふ  
繪師あり、生れ付て口吃り言舌あき  
らかならざる上家貧しくて身代は薄  
き紙子の火燧箱朝夕の煙さへ一度を  
二度に追分や大津のはづれに店がり  
して妻は繪の具夫は齋く筆の軸さへ  
細もこで登下りの旅人の童すかしの  
上産物參錢五せんの商ひに命も錢も

繫しが日蔭の師匠を重んじて半道餘  
りを夫婦づれ夜な／＼見まふぞ殊勝  
なる夫はなま中目禮ばかり、女房傍  
から通辭してハア、またはお  
よりませぬか誠にめつきりさ  
暖かに日も長ふ成まして世間は花見  
の遊山のさざは／＼／＼致しま  
するこなたは山蔭御浪人のおつれ  
／＼をいさめのため嫁菜のひたしに  
豆腐のにしめさ／＼へでも致しまして  
關寺が高観音へお供して春めく人で  
も見ませうと女夫申して居ります  
れど心で思ふたげつかり道者時分  
で店はいそがし洗濯物はつかへる爲  
業には／＼かいかず日おな一日立すく  
み何をするやらのらくらと急げ廻

る勢田饅只今せ／＼から貰ひまして練  
貫水の大津酒ゆめ／＼しうござりま  
すれ共此春からお仕合が直つて饅の  
穴から出る様に御世にお出でなされ  
ませほんにつべこべとわたしが言ふ  
事ばつかりこちの人の吃りさわたし  
がしやべりさ入あはせたらよい比な  
女夫が一組出来ませふア、おはもじ  
やさ笑ひける奥方も御挨拶よう祝ふ  
てたもつた今宵は奇妙な事あつて修  
理は苗字を許され土佐の光澄と名乗  
るぞよ、又平も隨分筆に心をつきや  
我名を上れば則師匠の名も出る道  
理ノウお徳そふちやないかまあ／＼  
よい所へ酒肴幸ひ／＼盃もいた  
いてあやかりやいのさ有ければ又


平時節と女房を先へ押出しせなかを  
突我身も手をつき頭をさげ訴訟有げ  
に見えければ女房お徳心得て誠に道  
すがら百姓衆の噂を聞き身は食也不  
具なりおマ、弟子に土佐を名のらせ  
兄弟子ばうか／＼さいつ迄浮世又平  
で藤の花がたげたおやま繪や繪おさ  
へた瓢箪のぶら／＼生ても甲斐なし  
と身をもんでの無念がり尤共哀れ共  
連添ふわたしが心の内申も涙わこぼ  
れまする奥様迄は申せしがお直の願  
ひは此時節今生の思ひ出死での後の  
石塔にも俗名土佐の又平と御一言の  
お赦しは師匠のお慈悲と斗りにて涙  
にむせび入れれば又平も手を合せ將  
監を三拜し疊にくひ付泣居たり將監

も不惑さに俱に心は亂るれどわざと聲をあらうげヤア又してもく叶はぬ願ひコリヤよつく聞け此將監は近江の國高嶋の御家來筋、則ち禁中の繪所小栗宗丹と筆の争ひ其上高嶋家の重寶雲龍の硯を宗丹達て所望すイヤキやつに持せじ我にたべも互ひに意地を言ひつりのりついに御前のお聞きに立つて某は勘當受て此浪人住居今でも小栗に従へば富貴の身と榮ふれ共一人の娘おみつに君傾城の勤させ子を賣つてくふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ土佐の苗字を惜むにあらすや修理の介は只今大功有そちには何の功が有る琴碁書畫ははれの藝貴人高位の御座近く参るは畫人物を得言はぬ身を以て及ばぬ願ひ似合ふた様に大津繪畫いて世を渡れ茶でも呑んで立歸れさあいそもなくしかられ

てお徳ははつこ力を落しコレ又平殿こなたを吃に産付けた親御を恨さつしやれと頼みなくく又平も我咽ふえをかきむしり口に手を入舌をつめつて泣けるは理り見えて不惑なる折節表に人音して將監殿やおはする光信殿さ呼はり、拔刀簀戸押開きすつこ入る將盟目早くお身は狩野の弟子歌の助ならすや姫君を御供せしか何さ、されば館の騒動いふに及ばす存知のこそく姫君の御供仕り漸々切めけ爰かしこに忍びしが主人四郎次郎行方しれず是第一の氣づかひと心迷ふ其内に敵手ひごく追かくるしや任せて置きま眞向に太刀さしかざし向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく四角八方に切ちらせしが敵は大勢こなたは一人なんなく姫君奪ひ取られ下の醍醐は雲谷が館なり伴左衛門を始あ

**料理上席**  
**ルリケ**  
 迄半時一十代

お師に  
**をり半**



大阪 心齋橋  
 本本店  
 電話 五〇〇番

として門をかためて寄付す刀のはがれつゝ  
 かん迄さかけいらんせししがイヤ／＼  
 主人の身の上心元なし後をしたふて尋る所  
 存姫君の御事は將監殿宜しく頼み存するこ  
 詞も足も血氣の若者後をしたふて走り行く  
 將監心も心ならずサア／＼我爲の一大事い  
 かッはせんと思案顔奥方も氣づかはしくイ  
 ヤ／＼せいては事の仕損じあらん殊に其伴  
 左衛門姫君に心をかけむたいにくどくぞ聞  
 く上はお命には氣づがいなしどうぞ辯舌の  
 よき人に將軍家の御意さたばかり取りかへす  
 分別はござらぬかさいふに將監げに誠せく  
 事はない何れもいふておみやれと顔に小皺  
 頬杖つき各々小首かたむくる又平何ぞ言た  
 げに妻の袖引せなかつき指さしすれ共合點  
 行かすしんきをわかし女房を引退てつとこ

出師匠の前に諸手をつき唾を呑込でコ、  
 此討手にはセ、拙者が参り姫君をウ、  
 ばひと、取つて歸りましょ將監きつと見ヤ  
 ア面倒な吃め思案牛に邪魔入るそこ立てう  
 せぬかこ呵られてもおちるにこそイヤ膝共  
 ダ、談合ぞ申す口こそ不自由なれ心も腕も  
 天下にコ、こはい者がない拙者が分別致し  
 叶はぬ時はえんせう助定あつちへやるかコ  
 一こつちへ取るか首むけのバ、ばくち命の  
 相場が一分五リン浮世又平と名乗つては親  
 もない身がら一身命はばきだめの芥名は順  
 彌山と釣かへ悴の時から奮功なし命にかへ  
 て申し上るも師匠の苗字を繼たいばつかり  
 拙者めを遣はされて下さりませ申し／＼さ  
 り逆は御承引ないか吃でなくば斯は有るま  
 いエ、／＼／＼うらめしい咽ぶふをかき破

!!を命用御へ堂樂文非是は品げやみお答贈

お菓	お	あ	美	お	東	京	文	文	文	義	短	結	珍
子	か	音	こ	富	富	樂	樂	樂	太	冊	び	味	
	き	あ	し	貴	貴	豆	豆	せん	夫	昆	昆	一	
	め	め	め	密	密	卷	卷	べい	せん	布	布	式	
	め	め	め	寄	寄	い	い	べい	べい	布	布		
	き	め	め	寄	寄	い	い	べい	べい	布	布		

文樂座西角  
文樂堂

電南六六九〇

つてのけたい女房共さりさばつれないお師匠ぢやま聲を上げて泣き居たる將監猶も聞入なく不具の癖の述懐涙不吉千萬相手に成て果しなしこれく修理之介御邊向つて思案を廻らし奮返し來られよ早くく畏つたと刀提立出る又平むづさ抱きさめマーマンマン待つてくれ師匠こそつれなく共弟子兄弟の情けじやこそ此又平をやつてくれ後とも言はぬスースーすぐ様コリヤ又平某やだけに思ふても師の命は力なし爰を放せイイイヤハハ放しやせぬ放さればぬいて突ぞツ突コー殺せハツハハハ放しやせぬぞ修理之介も持あつかひ放せくご掬合たり將監夫婦も氣をあせり放せくごさむれ共耳にも更に聞入れず女房お徳總り付あれお師匠様の御意が有るおさましの

氣ちがひやこもぎ放せば女房を取て投げ踏付けくじだんだ踏みナハハ何じや儂迄がキキ氣ちがひこはエ女房さへあなごるか不具は何の因果ぞやごどうご座を組み疊を打て聲も惜ます歎きける心ぞ思ひやられたる將監重れて汝よく合點せよ繪の道の功によつて土佐の苗字を繼てこそ手柄共いふべけれ武道の功に繪師の苗字讓るべき仔細なしならぬくと言はれば女房はつご居直つてサア又平殿覺悟さつしやれ今生の望は切れたぞや此庭の手水鉢を石塔と定こなたの繪像を畫きこめ此場で自害し其後の贈號を待つ斗りと硯引よせ墨すれば又平黙き筆を染め石面に指向ひは生涯の名残りの繪姿は昔に朽る共其名は石魂に止まれご我姿を我筆の念力やてつしけん厚さ尺餘の御



現 代 的

大 阪 市 南 區 御 跡 町 九

齋 部 德 太 郎 經 營

電 話 戎 三 七 五 六 番

影石裏へ通つて筆の勢い墨もきへず兩方より一度に畫いたる如く也將監大きに驚き入り異國の王義之趙子昂が石に入り木に入るも和畫において例なし師に勝つたる畫工ぞや浮世又平を引かへ土佐の又平光起そ名乗るべし此勢ひに乗て姫君を奪ひかへせよ有ければつご斗り夫婦が悦び又平は忝し口吃禮より外は涙にくれ踊り上り飛上り嬉し泣こそ道理なれ重れて將監心剛にて心ざし厚けれ共敵に向つて問答せん事いかゞあらんぞ有ければ女房聞もあへず常々臺頭の舞を好きわれら諸共つれ脇にて舞はれしがふしの有事は少しも吃申さずサア又平殿悦びにめでたう舞て立まいかツツと答て立上り古き舞を身の上になぞらへてこそ舞たりけれ去る程に鎌倉殿義經の討手を向へし

武勇の達者をゑらばれし夫は土佐坊是は又土佐の又平光起が師匠の御恩を報ぜんも身にも應ぜぬ重荷をば大津の町や追分の繪にぬるごふんは安けれご名は千金の繪師の家今墨色を上げにけりかくて女房いさみを付又もや御意のかはるべき早御立ちますめけるチいしくも申されたり身こそ墨繪のさんすい男紙表具の体なり共朽て朽せぬ金砂子極彩色におさらじも勇すみし勢はゆるし頼もし我ながら適繪筆の健氣さよ唐繪の燦繪張良を楯についたご思し召イザお暇さ立出る將監庭に飛びおり待々兩人吉左右の饒別せんご刀抜間も見せばこそ又平の像を畫し手水鉢二ツにごうご切破つたり一座の人々あきれ顔女房お徳惚りしコレ申將監様大事の門出命づく身を祝ふての舞

は用御の話電お

南  
5番・701番・711番  
(晨)132番・5291番  
西630番



づまは會宴御

いのじ感・いる明

のまさなみ  
理料泉温一南

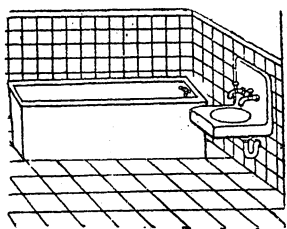
橋 ツ 四

理料泉温一南

諷何にお氣に入ませぬ又平殿を二つになさ  
 れしは不吉を願ふお心が但しは狂氣遊ばし  
 たかオウ疑はしくば言ひ聞かさん昔都  
 誓願寺の御佛は賢聞子芥子國さいひし人親  
 子名乗の其しるし片形作り合せし御佛なり  
 しに然るに此佛体朝暮兩眼より御涙頻成し  
 に時の名醫是を考へ五臟を作り込だる佛体  
 なれば正しく肝の臟の損じならんご二ツに  
 分けて是を直せば忽ち涙止りし事今の世迄  
 も割符の彌陀を隠れなし此理を以て又平が  
 魂込し此繪姿繪は吃られど吃るは舌。舌は  
 元來心の臟其心の臟調はざる故に吃る今石  
 面の又平を二ツに切破此將監繪師の手の内  
 中々思ひよられ共コレ此刀は主人より給は  
 る名作其名作の奇特を以て心の臟を斷切た  
 れば吃る事はよも有らじと言ふに又平頭

を下げハ、有がたしくいよ、首尾能  
 姫君の御供申し立歸らんご詞すいしき一言  
 に奥方始め人々も二度恠りに又平は我でに  
 我口疑はしく、らりるれる、まみむめも、  
 さしすせせ、かきくけこありやく直つた  
 くいふはく何を言ふ狸百疋棒百本天王  
 寺のたうく念佛十チ申せば佛に成る誓願  
 寺の佛の誓師匠の御恩を頭に戴きどうく  
 く力足踏又平は今ぞ出世の金願。あつ  
 ばれ諸人の繪本ぞと勇いさんで急ぎ行く。

西區立賣堀北通一丁目  
 新一橋  
**岡部商會**  
 阪急夙川  
**岡部商會支店**  
 電話西寄一九七六



**化粧多イ**  
**水道衛生工事**  
 洗面、浴場、  
**水洗便所設計**  
**汚水浄化装置**  
**特許無臭便所**

四ツ橋  
りよ

昭和七年  
二月の文樂座  
消息日誌

△一月三十一日

二月興行の初日開場。

△二月二日

南海電車和歌山バスの招待會開催。

△二月七日

吉例BK舞臺中繼放送に『合邦』を全國

へ。

中 駒太夫重造  
切 津太夫綱造

△二月九日

文樂會例会開催。

△二月十二日

日本生命保險會社主催の鑑賞會。

△二月十五日

「富久娘」花木本店の觀劇會開催。

△二月十五日

大阪市女教員連の鑑賞會。

△二月十八日

ニットーレコード交和會總會開催。

△二月十八日

大阪市玉三婦人會鑑賞會。

△二月二十日

南海電車和歌山バス招待會。

△二月二十日

小倉石油會社觀劇會。

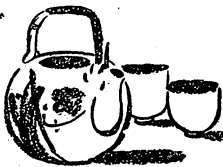
△二月二十一日

二月興行いよく打上ぐ。

大及御池橋

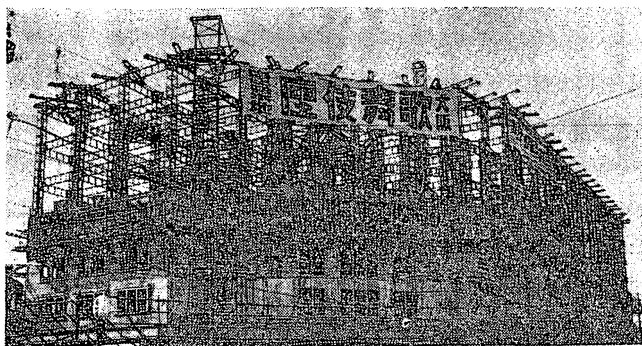
茶筌

電話新町三大二番





に遂は望要と氣香な烈鮮の代時新！年七第和昭  
 場劇開公的級弩超のウユヴレ、畫映、劇演て凝  
 睫目等吾に茲をゾーポるた溯潑の座伎舞歌阪大  
 ！すとんせ現顯に間の



**賞**

大阪 歌舞伎座宣傳標語懸賞募集

**懸**

<p>同氏 案名</p> <p>居所 大阪市南區久左衛門町八番地 松竹興行株式會社宣傳部宛。 必ず住所氏名明記のこと。 同案優秀のものは先着順により採用す。</p>	<p>締切 昭和七年四月三十日。 昭和七年五月末日。</p> <p>發表 本廣告掲載面にて發表す。</p>	<p>選者 大阪廣告協會</p> <p>凡例 「見たか歌舞伎座聞いたか評判」と言つた様な調子で。</p>	<p>制限 必ず十五字以内にて、内外に誇る大阪歌舞伎座のスピリット（劇場の新設設備その他を一丸にしたもの、或は大坂新名所としての）をなるべく平易簡潔に表現すること。</p>	<p>用紙 官製ハガキにて一枚一種、五種以内の事。</p>	<p>賞品</p> <p>一等 五拾圓（松竹觀覽切手）一名                  二等 二拾圓（松竹觀覽切手）一名                  三等 拾圓（松竹觀覽切手）二名</p> <p>投稿は必ず創作なる事を要す既に他座にて使用中のもの、模倣は採らす</p>
--	---	--	--	-----------------------------------	--

募集規定

！場開 今愈々 座伎舞歌 大阪 …… 場劇大の等吾・

## 文 樂 座 使 用 料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)	夜(自午後六時 至同十一時)	晝夜(自正午 至午後十時)
文 樂 座	約 850人	平日	80圓	100圓
		土曜	80圓	110圓
		日曜 祭	90圓	110圓

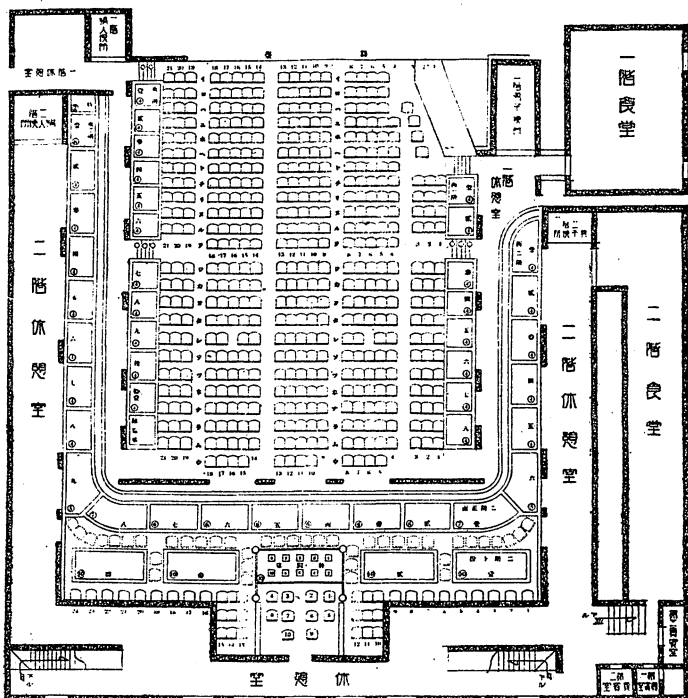
◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

## 器 具 御 使 用 料

器 具	備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝 夜	1回	10圓
活動寫真設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アブライトピアノ	晝 夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺	2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本	1圓
セラチンペーパー		1枚1回	1圓
大 衝 立	晝 夜	1對	5圓
演 壇 設 備	同	1回	2圓
其 他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラゲエータ使用料			無料

# 文樂座御席場案内



御観覧料の外一切御不要の上、大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由になれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ぬます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數様お團體様のお申込も御相談いたします。



# 文樂座 使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセマ
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
- 六、御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備モ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用済ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ滅失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセシ
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御断リ申シマス
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取出アラレシ時ハ半額御返却申シマス
- 十二、既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任セマセマ

五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用

十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取出

御・休・憩・は

一階西側の御休憩所へ

お茶と  
蒸タオルの  
設備が御座ります。

各廊下にも喫煙臺が  
御座りますから  
お煙草は此處で召上  
て下さい。  
場内の喫煙は御遠慮  
下さい。

お・土・産・に

文樂木版手摺繪葉書

春陽會に於て文樂繪に就て  
定評ある齋藤清二郎氏の作品

・ 毎月發行 ・

三枚一組

美しい包装共

一部

金五十錢

フランス語の

『文樂人形芝居の研究』

宮嶋綱男氏著

一部 金壹圓八十錢

木谷蓬吟氏著

『文樂今昔譚』

一部 金二圓

月刊雜誌

『道頓堀』

一部 金三十錢

**お食事は**

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待ち居ります。

**賣店は**

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、香附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

**お化粧とお手洗**

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

**お煙草は**

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

**御携は帶**

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたします。御演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが、不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

**お出口は**

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

**貴重品は**

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのまきは御携帶願ひます。

**お場席券**

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居ります。からお場席の番號をお忘れないやうに御願ひいたします。

**案内人へ**

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

**幕間中は**

案内人がお茶を差し上げます。からお場席で御自由にお飲み下さい。

**場内にて**

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

**出演者**

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

**當座御使用の**

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種備物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

**御休憩の間は**

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座います。からお場席下下さい。

**四ツ橋 文樂座**

前賣切符専用電話南四七二二番

電話南 七七八八番

は合集御の月三春  
る盛咲華の術藝土郷  
て場劇會宴の一唯阪大

を會宴御の座樂文

席子椅等……………は覽觀御  
食洋・食和……………は事食御  
入本床と割役……………附番  
影撮別待たれるを形人…眞寫念記 (分様名一御) 也圓五金  
(すまし致成連様る來出のり歸持お日既)

すま願に前日五げだるな上以様人廿は込申御

いさ下げ附申おへ番壹壹七四南は話電お

昭和七年三月一日初日

初日・二日目 二時開幕  
三日目より 三時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席 御一名 金三圓  
二等 席 御一名 金一圓五十錢  
三等 席 御一名 金八十錢  
一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席 は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七二番  
專用電話 南四七二番  
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座るますが、靴草履はそのまゝ御入場出来ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

すま希へ部輯編座樂文は向の望希載掲御告廣トツカへ誌本

刷印るゆらあ

所刷印堂英日井永

目一通堀佐土區西市阪大  
番三八〇三長 }  
番〇四九四 } (44) 堀佐土  
番一四九四 }



三ツクニ印  
商標



録 標

# 栄養志る六



特許 専賣 商標

## 栄養志る六

お造るは五十分  
NET 350GR (12.3oz)  
MADE IN JAPAN



ウメは見頃  
ウマイは  
栄養しるこ  
一家團樂に  
是非此の一罐を

御類似品あり、ミクニ印を指定を乞ふ

發賣元 株式会社 松下商店  
大阪高麗橋